291.65-Y45ウ
1200500733142
.65
25

大和路
第十一

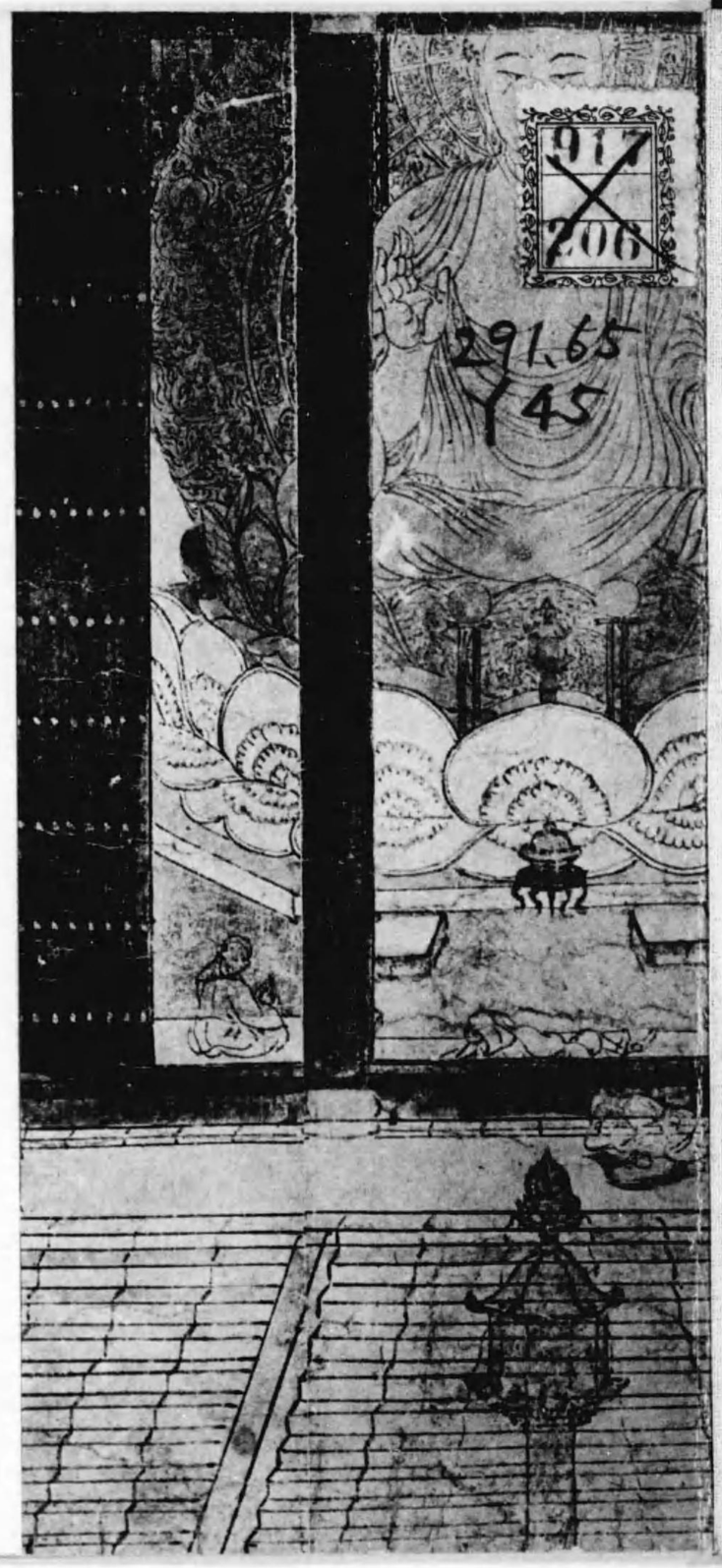
東大寺

黒田昇義著

始

大和路 第一二

東大寺



917
206
291.65
Y45

東大寺

関西急行鉄道株式会社寄贈本

黒田昌義

昭和十七年

西 917
號 206

目次

東大寺略史……一
大佛造顯……三
東大寺の造營……六
伽藍の保持……一一
治承の炎上……一三
鎌倉の再建……一五
重源上人……一八
鎌倉から室町へ……二一
永祿の炎上……二三
苦難の再興……二四
明治維新とその後……二九

伽藍巡拜……一一三
寺觀の現況……一二五
南大門……一三七
金堂院……一四一
東塔院址、西塔院址……一五四
講堂院址……一五八
食堂院址……一五九
正倉院……一六〇
西面の諸門……一六四
鐘樓あたり……一六八
三月堂……一七二
三月堂雜舍……一〇一
二月堂……一〇一
二月堂雜舍……一一〇
開山堂……一一三
四月堂……一一五
東南院……一一六
眞言院……一一八
戒壇院……一二〇
勸進所……一二四
指圖堂……一二八
知足院……一二八
手向山八幡宮……一二九
附記……一三三

東大寺略史

大佛造顯

佛教公傳して二百年、華麗な伽藍は諸國の山野にちりぼひ、都の文化は咲く花の匂ふが如く、歴代聖帝の御理想とせられた佛教國家の建設は略々具現せられて來た。この時に當り聖武天皇は華嚴經に說かれる盧舍那佛一軀を敬造し奉り、以て法恩に霑はざる天下の蒼生をして、三寶の威靈により乾坤相泰かに、萬代の福業を修め、動植咸榮えしめんことを御發願遊ばされた。

盧舍那佛と云ふのは、毘盧遮那佛と云ふに同じく、釋迦佛の本身を云ふのである。佛身に對する思想が發達した結果、歴史的人物たる釋迦佛は應化の身であつて、その本身は全宇宙に周遍する眞實の佛身であるとなし、盧舍那佛と稱するに至つたもので、即ち盧舍那佛は全法界の大宗である。從つて天皇の御發願はわが佛教國家の完成に際して巨大な金字塔を打ち立てさせ給うたものである。

しかしこの御發願には一つの動機があつた。それは天平勝寶元年十二月の宣命によると、天平十二年河內國大縣郡知識寺に坐す盧舍那佛の尊像を拜み奉つて、その靈異に感應し給うたことに因す

る。知識寺の遺址は大阪府中河内郡堅下村にあつて、堂宇に因める地名を存し、遺瓦の散布する中に塔の心礎を殘してゐる。

さて大佛造顯の大詔は、天平十五年十月十五日、當時都し給ひし近江の紫香樂宮に於て渙發せられた。いまその詔を拜すると、この御發願に於ける天皇の雄渾なる御理想と不退轉の御決意とが秀勁な文體によつて述べられてゐる。

朕以薄德恭承大位志存兼濟勤撫人物雖率土之濱已霑仁恕而普天之下未洽法恩誠欲賴三寶之威靈乾坤相泰修萬代之福業動植咸榮粤以天平十五年歲次癸未十月十五日發菩薩大願奉造盧舍那佛金銅像一軀盡國銅而鎔象削大山以構堂廣及法界爲朕知識遂使同蒙利益共致菩提夫有天下之富者朕也有天下之勢者朕也以此富勢造此尊像事也易成心也難至但恐徒有勞人無能感聖或生誹謗反墮罪辜是故預知識者懇發至誠各招介福宜每日三拜盧舍那佛自當存念各造盧舍那佛也如更有人情願持一枝草一把土助造像者恣聽之國郡等司莫因此事侵擾百姓強令收斂布造退還知朕意矣。

従つて工事は紫香樂に於て企てられ、その廿日早くも寺地の土工に着手するや、行基は弟子を率ひ

衆庶を勸誘していちはやく工事の遂行に翼賛し奉つた。翌十六年十一月には佛體の骨柱が建ち、天皇親臨して御手づから立柱の綱を引かせ給ひ、工事は順を追うて進められたが、翌十六年五月再び都を平城に復し給うたので、大佛造顯の事も平城に移され、京の東郊山金里に於て改めて開設せられることとなつた。即ちこれが東大寺建立の所緣であるが、この地たるや天平十二年良辨が天皇の親臨を仰ぎ奉り初めて華嚴經の講筵を開いた金鐘寺の寺地である。（東大寺要錄 本願章第一）天皇が華嚴經の本佛たる盧舍那佛造顯の靈域としてこの地を定められたのも亦故なしとしないであらう。因みに、紫香樂宮阯は現滋賀縣甲賀郡雲井村にあり、附近に銅の鑄屑を少からず出土する地點があつて、甲賀寺に於ける大佛造顯の遺物と考へしめてゐる。

なほこの御事業に對する天皇の御決心は、天平寶字二年八月九日、天皇に「勝寶感神聖武皇帝」の尊號を追上し奉つた際の詔勅の中に、次の如く見えてゐる。

昔者先帝敬發洪誓、奉造盧舍那金銅大像、若有朕時不得造了、願於來世改身猶作

拜すだに畏き極みではないか。又續紀天平寶字四年六月七日、光明皇后崩御の條に

皇后仁慈志在救物、創建東大寺及天下國分寺者、本太后之所勸也

と記されてゐるから、この事に對する皇后の御内助を知らねばならぬ。

東大寺の造營

さて平城京の東山麓に移された大佛の造顯は、天平十七年八月廿三日事始めが行はれた。この日の狀を東大寺要錄本願章第一は

天皇以御袖入土持運加於御座公主夫人命婦采女文武官人等運土築堅御座

と傳へてゐる。翌十八年十月頃、雄型の塑像の大佛が出來た。それから諸般の準備に約一ケ年を要し、鑄造に着手したのは十九年九月廿九日であつたが、何しろ高さ五丈に餘る大像であるから、先づ基座から始めて漸次上部に鑄繼ぐこと八回、衆人は一時は成らじと疑つた程であつたが、宇佐八幡の神助を得て天平勝寶元年十月に至つて遂に成就することを得た。これに從つた名譽の大佛師は國公麻呂、大鑄師は高市眞國、高市六麻呂、柿本男玉の三人であつた。

しかし鑄造は終つても造佛は終つた譯ではない。佛身には黃金が塗られねばならぬが、當時のわが國にはこの大像を莊嚴する程の黃金の準備はなかつた。從つて黃金の調達は當局者の最も心を痛

めた問題であつたが、鑄造の終る少し前、天平廿一年二月、陸奥國守百濟敬福から部内の小田郡から黃金發見すといふ朗報が入つた。天皇の御喜びは非常なもので、四月朔東大寺に幸して佛前に產金の報告をなし給ひその十四日改元して天平感寶と稱へさせ給うた。續いて廿三日敬福更に黃金九百兩を貢したが、この喜びの大きさは、五月十二日越中國守の館にあつて大伴家持が心をこめた慶讃歌に遺憾なく表されてゐる。萬葉集卷十八

陸奥國より金を出せる詔書を賀ぐ歌一首並に短歌

葦原の、瑞穗の國を、天降り、しろしめしける、天皇の、神の命の御代重ね、廣み淳みと奉る、御調寶は數へ得ず、盡しも兼ねつつ、然れども、吾大王の諸人を誘ひ給ひ、善き事を始め給ひて、金かも、樂しけくあらむと、思ほして、下惱ますに、鷄が鳴く、東の國の陸奥の、小田なる山に金ありと奏し賜へれ、御心を明らめ給ひ、天地の神相納受ひ、皇御祖の、御靈助けて、遠き代に、かかりし事を、朕が御代に、顯してあれば、食國は榮えむものと、神ながら、思ほし召して、もののふの、八十伴の雄を、まつろへの、むけのまにまに、老人も、女童兒も、其が願ふ、心足ひに、撫で給ひ、治め給へば、此をしも、あやに貴み、嬉しけく、愈思ひて、大伴の、遠つ神祖の、その名をば、大來目主と、負ひ持ちて、仕へし官、海行かば、水漬く

屍、山行かば、草生す屍、大皇の、邊にこそ死なめ、顧みは爲じと言て、丈夫の、清く彼の名を、古よ、今の現に、流さへる、祖の子等ぞ、大伴と、佐伯の氏は、人の祖の、立つる言立、人の子は、祖の名絶えず、大君に、奉仕ふものと、言ひ繼げる、言の職ぞ、梓弓、手に取り持ちて、劍大刀、腰に取り佩き、朝守り、夕の守りに、大王の、御門の守護、我をおきて、また人はあらじと、彌立て、思ひし增る、大皇の、仰言の幸の、聞けば貴み

反歌三首

丈夫の心思ほゆ大君の御言の幸を聞けば貴み

大伴の遠つ神祖の奥津城は著く標立人の知るべく

天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に金花咲く

七月二日、天皇は大佛の鑄造を了らんとするをみそなはし給うて、皇太子(孝謙天皇)に讓位あらせられ、年號も天平勝寶と改めさせ給うた。その月廿四日大佛の鑄造は了つた。よつて十二月廿五日孝謙天皇は太上天皇、太后と共に東大寺に行幸あり、鑄成の狀を嘉賞あらせられ、越えて四年三月十四日、塗金を始め、四月九日には待望の開眼の供養會を擧げさせられた。天皇は文武百官を率ゐて幸し、齋を設けて萬僧を講ぜられた。音樂は花と降り舞踊は蝶と亂れた。續日本紀の記者はこの日の狀を「佛法東歸より齋會の儀、未だ嘗て此の如く盛んなることあらざるなり」と記してゐるが、その盛儀は以て想像に絶するものがあつたであらう。この晴れの開眼使は天竺から來たといふ婆羅門僧の菩提遷那であつた。

蹟つて思ふに、天平十五年の着手から十ヶ年、その所用熟銅は七十三萬九千五百六十斤、白鑞一萬二千六百十八斤、錬金一萬四百四十六兩、水銀五萬八千六百二十兩、炭一萬六千六百五十六斛といはれる。(大佛殿碑文)顧みて呆然たらざる者はあるまい。

かゝる間に建築工事も順調に進捗した。造寺材木智識記(東大寺要錄卷二緣記章)によれば、材木知識五萬一千五百九十人、役夫一百六十六萬五千七十一人、金知識人卅七萬二千七十五人、役夫五十一萬四千九百二人、又財物を奉加せる人々には、利波志留志米五千斛河俣人麿、錢一千貫、揚部子嶋錢一千貫、車十二兩、牛六頭甲賀眞東錢一千貫、少田根成錢一千貫、車一兩、陽侯眞身錢一千貫、牛一頭田邊廣濱錢一千貫、板筏眞釣錢一千貫、漆部伊波布二百端夜國麿稻十萬束、屋十間、倉五十三間、があり「自餘少財不錄之」とあるから、資材勞力の寄進がこの國家事業に澎湃として寄せられた狀を見ることが出來る。

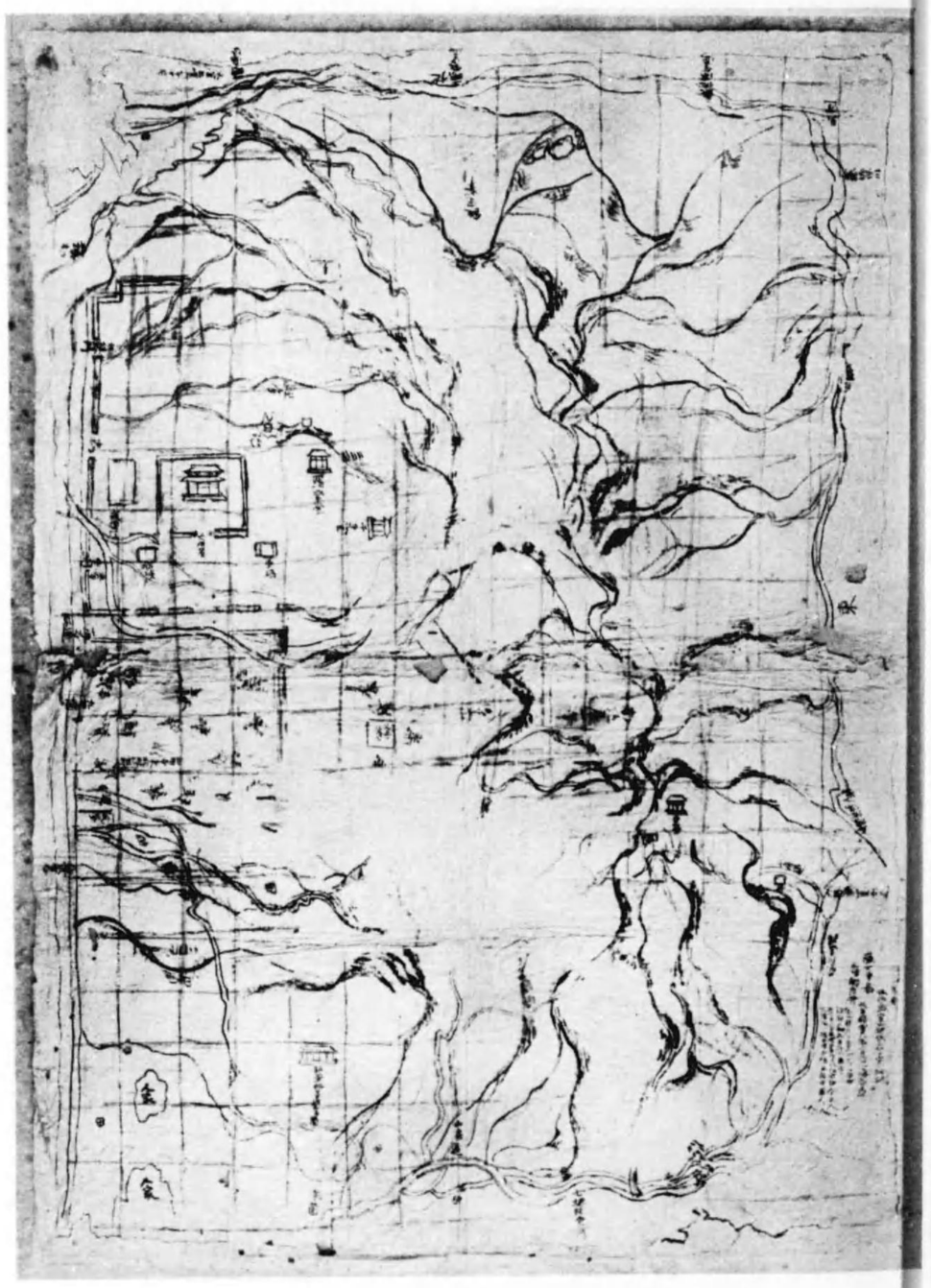
大佛開眼の頃には大佛殿も未だ莊嚴を遂げず、廻廊も落成してゐなかつたやうであるが、その後間もなく塔、講堂、食堂、諸門も竣成し、孝謙天皇御宇の末年には略〻主要堂宇の構設を了つた。

しかし堂舍の末にまで工事が完全に成つたのは平安朝に入つてからであるらしく、造東大寺司が廢されたのは續紀によれば延暦八年三月のことであつた。承和十三年の櫻會緣起は造營完備せるこの寺の狀を

凡此大伽藍爲寺之狀、大佛如金山、寶殿如妙高、廣大殊特溢大殊溢目滿目不及心言、……寶塔高妙湧於東西、縱廣正等左右無比、各七層級、俱九重盤、寶鐸箜篌交音成韻、遠見之者如貫菩薩、近仰之者如重寶蓋、……殿堂步廊爛然關匝、諸院堂左右相對、形十方淨土、表三寶名號、房舍寶殿連綿、寶幢幡蓋行列、蓮池花苑界別。

と記してゐるが、この夢のやうな美辭麗句も、この伽藍にとつては過少にすぎたことをわれわれは後篇に於ける堂舍の各說に於て見るであらう。

當時の寺地は天平勝寶八年勅によつて定められたところによると春日神社の社地と興福寺の東野廿七町を除いた若草山・春日山を含む廣大な面積を擁し、寺院地はここに南と西と北とに築地を廻らしたものとして描かれてゐる部分で、その廣さは凡そ南北八町弱、東西八町餘に當つてゐる。



天平勝寶八歲勅定東大寺四至圖

伽藍の保持

延暦三年、東大寺全伽藍の造營畧々終を告げんとする頃、都は山城に遷されることとなつた。三代實錄によればその後七十七年にして「都城道路變爲二田畝一」と記されてゐるから、遷都後の奈良の都は一瞬にして寂光の廢都と化したことが知られ、もはや政敎の中心ではあり得なかつた。從つて平安朝の東大寺は漸く國家的崇敬の第一線からは遠ざかるべく餘儀なくされるに至つたが、草創の餘光の中に榮光の伽藍は護持せられてゐた。しかしかかる大營作であつてみれば、破損は次々に生じ、その修理と維持とには多大の苦心と經營とを要した。

即ち大佛殿は、はやく寶龜二年、副柱を立てて補强せなければならなかつたし、大佛は御背に破損を致し、左手は絶え去つた。これは延暦廿年實忠によつて復舊することを得たが、その後廿六年を經て天長四年には沈下を來し、或は新に破損を生ずるに至つた。依つて大佛の背後に、延暦の修理に於て小規模ながら設けられてゐた小山を更に擴大してこれを防ぐこととしたが、承和三年には殿內四天王の內、毗沙門天像が西南に五尺四寸程傾倒し、東西兩塔も破損を來した。

以上要錄卷七 雜事章第十

しかし、平安朝に於ける最大の事件は、齊衡二年四月十日・十一日兩度の地震のため、越えて五月廿三日大佛の佛頭は轟然たる音響を殘して顚落するに至つた事である。

朝廷に於ては、六月六日、參議左大辨兼左近衞從四位上藤原朝臣氏宗をして大佛頭墜落の狀を見分せしめ、七月二日、參議宮內卿從四位上淸原眞人瀧雄等を遣して本願聖武天皇の佐保山陵に、九月には少納言從五位下利見王をして八幡大菩薩に宣命を奏せしめ、冥助を乞ひ奉つた。しかし修覆は直ちに始めらるべくあまりに困難であつたが、修理東大寺大佛司檢校傳燈修行賢大法師位眞如、大納言正三位兼行右近衞大將藤原朝臣良相等奏して「天下の人をして一文の錢、一合の米を論ぜず、力の多少に隨つて加進することを得しめ」以て修理の料に充てんことを乞ひ、許されて事は漸く軌道に乘り（要錄、卷十）、同三年五月廿五日、右大辨從四位上淸原眞人峯成を遣して佐保山陵に修理の事を奏し奉るに至つた。（文德實錄）

貞觀二年四月八日、詔して東大寺廬舍那佛會の事、惣じて修理大佛檢校修業傳燈大法師眞如に處置を聽し、又二品治部卿賀陽親王、大納言正三位源朝臣弘、正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿彌善男等に供養大佛會の事を勾當せしめられた。佛頭は巧工齋部宿彌文山によつて、轆轤を用ひ引き上げられて、本躰に復した。貞觀三年三月十四日、修理供養の大會は執行せられた。（三代實錄）

その後も東大寺には種々の問題があつた。仁和五年四天王像並びに東西兩塔を修造したが、延喜十七年十二月一日夜、火災によつて講堂、三面僧坊を失つた。講堂の再興は直ちに着手せられた模樣で、延長四年諸佛像を造り、同五年十月廿六日には堂供養を遂げてゐる。承和四年十月、西塔が又雷火に災せられた。先きに竣成した講堂の諸佛は同五年五月九日供養があつた。天曆七年九月講堂を修理し、降つて應和二年八月卅日の大風には南大門が顚倒し、應保元年に再建された。寬弘五年尊勝院が燒失した。同六年十一月東塔を修理し、同四年食堂、登廊、廻廊等を修理した。その他に永延元年大佛の繡曼荼羅を修理し、元興寺の元朝改めて地神を書いたことがあり、永承三年朝緣が再び大曼荼羅を修補してゐる。（以上扶桑略記、東大寺要錄、東大寺別當次第）

しかしかくて藤原氏のわが世をば望月と思ふ天下もすぎて、武門の勃興するや、その紛爭に介入した東大寺は恐ろしい災害を持たねばならなかつた。それは治承四年十二月廿八日、平重衡の率ゐる大軍によつてこの尊貴な寺が一場の炬火に附せられた事件である。

治承の炎上

事の起りは東大寺が後白河法皇の皇子以仁皇の平家討伐の擧兵に應じて蹶起したことに因する。

東大寺雜記東大寺續要錄造佛篇によると、事の經緯は

治承四年庚子四月廿二日安德天皇高倉院第二子母建禮門院即位同五月十五日於高倉殿欲掠取一院第二皇子皇子逃遁向于薗城寺同廿六日遂逃下南都之處於途中被誅伐畢

同六月一日遷都於福原同十一月廿六日又歸于平城然間興福衆徒猶憐皇子之儀欲遂會稽之思連々蜂起種々帳行相國禪門鬱於此事三位中將重衡爲官兵下向治承四年十二月廿八日燒拂東大興福兩寺畢。

とあり、その慘狀は

大佛殿四面廻廊講堂三面僧坊食堂八幡宮東塔戒壇院大湯屋上院閼伽井屋白銀堂東南院尊勝院其外僧坊民屋悉以燒失暴風吹自西猛火熾于中滅亡時臻鳴咽不休所殘法花堂二月堂同食堂三昧堂僧正堂鐘堂唐禪院堂上司倉下司倉正倉院國分門中御門砧礒門南院門等也。

と記されてゐる。末法の沙汰と云ふも愚かであらう。藤原兼實はこの狀を聞いて「世の爲め、民の爲め、佛法王法滅盡し了る歟。凡そ言語の及ぶ所に非ず。筆端の記す可きに非ず。」「惡運の時に當り、破滅の相を顯す歟。誠に時運の然らしむる事と雖も、當時の悲哀父母を裏ふよりも甚し。想國生れて此時に逢ふ。宿業の程來世又憑み無き歟。天を仰いで泣き、地に伏して哭す。數行の紅淚を拭ひ、五内の丹心を拉く、言ふて餘りあり、記して益無し。」玉葉と嘆じてゐるが、國帑を盡し、精を致した東邦最大の伽藍が一場の煙と化し去つた光景は思うて凄絶の限りではないか。天平文化の最大にして最美なる營作はかくして地上から永久に失はれてしまつたのである。

翌五年閏二月清盛薨じ、續いてその一族西海に敗滅するや、時人はひとしくかかる大伽藍を冒し盡した徒輩に加責なき佛果の至れるをみた。

鎌倉の再建

天下無雙の大伽藍の燒失は當時の民心を痛く刺戟した。よつてその再興は上には皇室の優渥なる思召を戴き、新興鎌倉幕府の絶大なる外護を受けて直ちに着手せられた。殊に鎌倉幕府がこれに力を致したのは、天下の名刹東大・興福の二大寺を一炬に附して民心を失うた平氏の失敗の跡に鑑るところがあつたからである。

治承五年六月造寺並に造佛官の任命があり、その八月には醍醐寺の僧俊乘坊重源に勸進の綸旨が

下つた。重源上人は天平の故事に倣ひ、行基菩薩の先蹤を追うて、大勸進となつて再建の局に當り、直ちに一輪車六輛を造つて七道諸國を勸進することとなつた。鎌倉幕府からは米一萬石、沙金一千兩、上絹一千疋の寄進があり、銅以下資材は陸續と集つて來たが鑄造技術のすぐれた工人が見當らないので困却した。ところが偶々宋の工匠陳和卿の來朝があつたので、重源は彼を說得して工事を托した。先づ御頭の螺髮の鑄成から始められ、次いで右の御手、御首と順次鑄上げて行つた。これには和卿の下に舍弟陳佛鑄等の宋人七人と、我國の鑄物師草部是助以下の十四人、小工十一人とが協力從事した。同年三月御光(光背)一基が大佛師法印尊、弟子法眼院實、法橋覺朝等總勢六十七人を以て造られた。盧舍那佛の巨像がかやうに上下の協力に依つて完成したので、大佛殿の造營はまだ進捗しなかつたけれども、開眼供養を行はれることとなつた。

文治元年八月、後白河法皇東大寺に幸して、自ら開眼の儀を行はせ給うた。法會は盛儀を極めたものであつた。その後幕府は建久五年三月沙金二百兩を進めて、大佛光背の修理料にあて、同年五月更に百三十兩を寄進した。當時大佛を禮拜した雅賴は「昔より御面相は一定劣らしめ給ふの樣見給候き。御面相ばかり金色なり。未だ他所の磨瑩に及ばず候。」玉葉と云つてゐるが、この面相に關する彼の批評は和卿等の宋風の形相に未だなじみがなかつた爲めであらう。

さて開眼供養はすんだが、大佛殿の造營は更に一大事業として殘されてゐた。建久元年七月大佛殿母屋柱二本を立て、同年十月上棟の式を行ひ、再び後白河法皇の行幸を仰いだ。同二年閏十二月幕府は畿內及び東海道の地頭に命じ、用材の運搬に協力せしめ、翌三年中に柱百十八本を曳くべき旨を傳へしめてゐる。同四年四月幕府は朝廷に乞ひ造營資の補足として備前國を東大寺に附せられ、更に朝命を奉じ諸國の守護、並びに御家人に命じて造像を助成せしめ、建久六年落慶供養を行ふこととなつた。

賴朝一行は三月十日南都に下向し、雲霞の如き隨兵を從へ東大寺東南院に入つた。後鳥羽天皇又三月十日御發輦あつて、十一日申刻東大寺西門から美豆頓宮に入御あらせられた。明くれば建久六年三月十二日、天皇東大寺に行幸あらせられ、落慶供養は千僧參列の下に嚴かに執修された。落慶法要終つて勸賞の儀が行はれ、重源上人は大和尙位に叙せられた。かくて大佛殿の落慶は罹災後十六年目に供養を遂げた。

然しなほ諸堂に安置すべき佛像の造顯や諸堂宇の再建が殘されてゐたが、それも朝廷や幕府の庇護によつて完成に向ひ、建仁三年には總供養が擧行されたが、舊宇の修理その他を了へて造營全く成つたのは、鎌倉の中期に入つてからであつた。

俊乗坊重源上人

重源上人

東大寺の創建が聖武天皇の御叡願によつた樣に、鎌倉の再建は後白河法皇の御叡慮に負ふところ多く、源頼朝の外護に俟つところ亦甚大なものがあつた。しかし創建の際の如く國家事業でなかつただけに、勸進と經營とに當つた重源上人の功績は銘記されなければならぬ。殊にこの造營に當つて彼が積極的に採用した大陸の文化と技術とは日本の美術史に偉大な新風を導入した。

重源は紀季重の子で、俗名を刑部左衞門尉重定といひ、紀氏系圖十三歳にして上醍醐に入り、名を重源と改め、眞言の修行に專念したが、法然上人に歸依してからは、自ら南無阿彌陀佛と號して念佛を勸めた。玉葉に「聖人は渡唐三箇度で、彼の國の風俗は委しく見知してゐる」と記されてゐるから、早くから宋に關しては詳しい知識の所有者であつたが、南無阿彌陀佛作善集によれば、大唐明州阿育王山の建築に際し、周防國の御材木を渡し、舍利殿を起立し奉り、修理のため、又柱四本・虹梁一支を渡し奉つたとあり、又その舍利殿は二階三閣の精舍で、中央の間は廣さ三丈東大寺造立供養記といふ規模のものであつたと云ふから、彼は單なる宋文化の愛好者ではなく、その技術面にも習熟

してゐたことを注意しなければならぬ。

、從つて、この宋の技術に對する信頼が東大寺再興の最も重要な佛頭新鑄の榮譽を宋工陳和卿に委ね、未だ天平文化の傳統根强い南都に於て、しかも聖武天皇以來の尊嚴を護持する寺の再興に當つて、傳來の建築樣式を止揚して宋の新風によらしめたのであらうが、又彼が自ら恃むところある技術家であつたことを示す好箇の話柄は、彼が大佛の後山を撤却した事の經緯であらう。大佛の後山とは、嘗て大佛傾倒の危險から平安の初葉實忠によつて築かれたものであるが、彼は人々の反對を押し切り、造寺官の實檢をも俟たず、獨斷でこれを壞ち去り、佛背の破損を修理した。玉葉に「山を壞つ事萬人甘心せず」とあるが、この處置の確かさはいまの大佛がこれを立證してゐる。從つて法然上人繪傳に彼を評して

おほかたよろづにはかりごとかしこき人なりければ、そのころのことわざにて、支度第一俊乘房とぞ人申ける。

とあるが、重源はまことにかゝる大事業を托するにふさわしい頭腦と技術とを備へた人であつた。

さて重源が東大寺の再興に當つて採用した新建築樣式――天竺樣と云ふのは、斗栱を從來の如く柱の眞上に組まず、柱の脇腹に材木を挿し通し――これを挿肘木といふ――これに斗をのせて順次外

方にせり出すと云ふ方法を用ひ、斗には皿を附し、また一種獨特の繰形を隨所に用ひた直截にして構造簡潔な樣式であるが、これが宋の樣式をどの程度に攝取したものかは審かでない。しかしこの樣式は構造的には便利な點もあるが、何となく粗豪にして未完成の趣があり、日本人の好尙には適しなかつたので、その純粹な形式は重源上人の關係した建築以外には行はれず、彼の歿後は忽ち衰微して樣式の獨立性を失つた。從つて天竺樣の純粹形式は重源限りで終つたものであるから、重源樣とでも云はるべきものである。今その遺構にはこの寺の南大門の外に、播磨の淨土寺淨土堂が一宇存するに過ぎず、つい先年まで上の醍醐に經藏が殘つてゐたが、燒了したのは惜むべき限りである。なほ重源の宋の技術文化の輸入は以上の外に石工の技法がある。即ち伊行末の招聘であるが、事はいま般若寺十三重石塔の前に侍立する笠塔婆の刻銘によつて示される。

先考宋人行末者異朝明州往人也而來日域經歲月即大佛殿石壇四面廻廊諸堂垣塌荒蕪□□悉毀孤爲□□□□□吾朝□陳和卿爲鑄金銅大佛以明州伊行末爲衆殿□石舖故此土匪直也□者也則於東大寺靈地邊土中得石脩造之正元二年七月十一日□然逝去

伊行末の一統はその後鎌倉の石造美術界に偉大なる寄與をなした。この石造美術に於ける面は、陳和卿の一派が元久三年數々の非違を受けてはやく南都を去つてまた影響の著しきを見ず、建築の場合上述の如くであつたから、或ひは重源の導入した宋の技術文化の中で最も巨大な貢獻であつたかもしれない。因みに、重源の事蹟は南無阿彌陀佛作善集に詳細である。

鎌倉から室町へ

さてかかる一方灰から起ち上つた東大寺は、當時の新興佛敎の興隆と相俟つて果敢な敎學の復興を見ることとなり、戒壇院の中興圓照上人及び凝念大德、尊勝院の學僧宗性上人等の鎌倉佛敎界の偉才を出した。

この時代の末は、國史上最も悲しむべき南北抗爭の時代を現じたが、この時に於ける東南院聖尋の誠忠は炳として靑史に不滅である。

元弘元年八月後醍醐天皇の北條氏討伐の御企漏れ、天皇は取り敢えず南都に逃れんと思召さるるや、時の東大寺百十九代の別當であつた東南院の聖尋に御消息を遣された。聖尋はこの聖旨を拜して、直ちに寬寶をして手勢百五十人を以て先驅とし、實祐をして手兵二百人を率ゐて後陣とし、鳳輦を木津に迎へ、天皇は東南院に請ぜられ給うた。太平記 しかるに同じ東大寺の西室に顯實といふ僧

があつて、北條高時の一族であつたから頗る權勢があり、一山の衆徒も聖尋の方へ馳せ參ずるものが甚だ少かつた。そこで聖尋も事の成り難きを察し、廿六日鳳輦を奉じて、山城國和束の鷲尾山金胎寺に入つたが、ここも少なからぬ不便があつたので、廿七日天皇は南都の衆徒を警護に召し具して笠置の石室に行幸遊ばされた。（太平記、法隆寺別當記、東大寺雜集錄）聖尋の誠忠が終りを全うし得なかつたのは遺憾であるが、その赤誠は千歳に銘記される。この故を以て東南院は昭和九年三月、史蹟の指定を受けた。

室町時代に入つては、二三の堂塔の燒亡が傳へられる外には事もなく、旋廻する社會狀勢の中に莊園は荒され、年具米は停滯し、經濟力は漸減して、僧徒は無氣力となり、教學も弛緩し、衰頽の一路を辿るあはれさであつた。

永祿の炎上

室町末期の社會は下剋上の極み、遂に土一揆や馬借一揆から延いて庶民階級の蜂起は暴動と化し、地方の安寧と秩序は破壞せられ、これに乘じた土豪の勃興は亂麻の如き戰國時代を現出した。大和も勿論この景況を免れ得るわけはなく、永祿十年十月東大寺は松永久秀と三好三人衆との私鬪の厄を蒙つて再度の炎上に際會した。

事の起りは三好長慶の歿後、遺臣松永久秀大和に入り信貴山に城を構へて威權を恣にするや、三好三人衆と呼ばれた三好下野守、三好日向守、石成主税助はその主義繼を擁して久秀を除かんと謀つた。よつて久秀は城を奈良北邊の多聞山に築いて三人衆に備へた。時に義繼三人衆と隙を生じ遁れて久秀を賴つたので、久秀と三人衆との對立は益々激化し、永祿九年七月遂に戰端が開かれた。同年十二月三人衆は大擧して大和に攻め入り翌年四月大佛殿に陣して松永勢の多聞城と對峙した。

その五月二日石成は池田衆以下の兵一萬の來援を得て念佛堂、二月堂、大佛殿の廻廊に布陣するや、松永勢は戒壇院に第一線を布き、ここに一觸即發の危機は目前に迫つて來た。かくて同月十八日多聞山から火を發し、般若寺、文殊堂、佛餉屋、妙光院、觀音堂に延燒し、戒壇院の授戒堂へも飛火したが、松永勢は敵に陣地を與へることを恐れ、更に西院鄕、北水門、南水門に放火して民家を燒拂つてしまつた。多聞院日記はこれを「大天魔ノ所爲ト見タリ淺猿々々」と嘆いてゐるが、事はこれだけでは濟まなかつた。七月二十三日には、戒壇院、千手堂が燒落ちた。越えて十月十日夜に入つて松永勢は多聞城を出で、三好勢の本陣たる大佛殿へ夜襲を試みた。合戰の間に火を發し、

廻廊を一なめにした餘勢が大佛殿に延燒した。たけり狂ふ火焔は天を焦し、燒け落ちる物音は雷電の如く、さすがの盧舍那佛の大像も湯となつて崩れ落ちる有樣は淺猿しくも言語に絶する慘狀であつた。（多聞院日記、東大寺雜集錄所收蓮乘院演清記）

二月堂練行衆日記はこの日の悲運を次の如く述べてゐる。

十月十日夜子刻、彈正松永方三手になり、大佛殿江夜討、西の廻廊火を燃す、寺中の老若闘諍を恐れず、身を捨てゝ水を汲み、瓦を頽し消火すと雖も、西の風頻りに吹き、猛火本堂を燃燒し大佛、淨土堂、中門堂、唐禪院迄一時に炎上し畢んぬ。弗沙密王の寺を燒くが如く、會昌天子の法を滅するに似たり。視る者心を焦して無安火宅の理を觀ぜざる莫く、聽く者涙を流して缺滅世界の悲みを成す。

苦難の再興

永祿の炎上はさなきだに振はなかつた東大寺をいよいよ衰微させたが、再興の勸進は災後間もなく始められた。朝廷では東大寺からの奏請により、天平・治承兩度の勅願にならはせられて燒失の翌年綸旨を賜り、東大寺再興の事業に助勢すべきやう勸め給うた。一方この年春に至り、大和國山邊郡山田の城主山田道安なるもの銅板をもつて佛面を作り、（永祿五年南都大佛供養記、東大寺諸伽藍略記）その翌年自ら願主となつて大佛螺髮の鑄造に着手した。

大佛炎上後の修理に關する詳細なる記錄は缺けてゐるが、道安の佛頭修理に次いで十二年には京都方面にも螺髮鑄造が始められ（多聞院日記、藥師院舊記）、假屋の材木寄進（多聞院日記）、御本尊破損箇所の鑄造（藥師院舊記）等が始められてゐる。かくて元龜二年の春になると修理も多少進捗したらしく、多聞院日記四月二十三日の條に左の記載を見ることが出來る。

廿三日、於三若宮一舞有之、陽教房同道向、以レ次八幡ヘ參、大佛ヘ參リ、本尊柱ヲ立カヘ、下地ニテ可レ作之用意、昔モ本尊ノ腹中ニ心柱有レ之、則大ノ礎有レ之、元モ下地ヲハ柱クミシテ、スタチヲカキ、カヘヌリヲ作レ之、其上ヘカネヲキカケタル歟ト見タリ。

しかし尊像の修補はかくの如く着々軌道に乘つて行つたが、大佛殿の造營に至つては力及ばず、工事は一向進捗しなかつた。ここに於て朝廷では元龜三年二月東大寺に對し、山田道安をして大佛殿の再興を急ぐべき綸旨を下し給うた。

その六月、織田信長もこれに應じて阿彌陀寺の淸玉上人をして全國に勸進せしめたが、戰國の兵

亂によつて蒙つた社會の疲弊は未だ恢復せず、當時桁行廿八丈餘、梁行十六丈餘、棟高十六丈に餘る大建築を實現せしむるには相當の困難があつた。天正十一年九月十日には畏くも重ねて大佛殿再興勸進の綸旨が下され、天正十七年の春には大和大納言秀長によつて大佛鑄造並に修理が續行されるに至つたが、藥師院舊記世は未だ安定せず、從つて工事も遲々たるものであつた。それに加へて慶長十五年七月廿一日畿内を襲つた大風雨のため大佛の假屋を倒壞せしめ、東大寺雜事記漸く軌道に乘つてゐた復興工事に一頓座を生ぜしめた。

慶長十九年七月、天下の形勢も漸く落着いて來たので東大寺は使僧上生院を駿府に遣はして家康に謁見せしめ、諸國勸進によつて東大寺再興を促進せんことを請願したが、東大寺雜集錄、駿府記はかばかしい結果を見ず、大佛は依然として露佛であつた。延寶三年開板の南都名所集や同六年開板の奈良名所八重櫻の挿繪を見るとこの有樣が寫されてゐ、その頃奈良に遊んだ緇徒、墨客の詩文にもこれを慨歎する風懷が殘されてゐる。次に寛文四年の春來遊した隱元禪師の一絕を示さう。

天開名勝甲東方　一座巍々鎭法王
舊古虛空常蓋覆　度民福國永無彊

しかしかかる尊貴な大佛が何時まで露佛である筈はなかつた。やがて東大寺は熱烈なる一緇徒を得て、遂に多年の懸案であつた大佛鑄造と大佛殿の再興とを遂行し得ることとなつた。公慶上人の出現がこれである。

公慶上人は丹後國室津の人、父は京極高廣の臣で賴茂といひ、母は四宮氏である。上人は小字を七之助と稱へ、慶安元年の生れであつた。慶安三年上人三歲の時、父は故あつて致仕して南都に移つた。上人は萬治三年十三歲にして東大寺の大喜院に入り祝髮をおろした。偶々大雨の日、濡れそぼち給ふ盧舍那佛を拜み、慨然として大佛殿復興の志を起したと云はれる。爾來教學の研鑽を積み、三十五歲の時に八幡宮の造營に關して江戸に下り、幕府要路の人々に接して親交を結ぶ機會を得たのを好機として、貞享二年四月再び江戸に下り、六月大佛修覆のため天下に勸進することの許可を得た。それで翌三年十一月大佛殿に於て再興の事始めが修せられた。この日まづ奈良市中を勸進し、次いで鎌倉再興の大勸進俊乘坊重源の使用した蓮實の杓を携へて全國大勸進に發足したが、この度は時運これに幸して諸所からの寄進は陸續として集り、庶民の奉仕もこれに相應じた。貞享四年に上梓せられた奈良曝に廻廊の殘礎を叙して

此いしすへも年久しく、ちりにうづもれ有りしを、今度東大寺龍松院勸進ひぢりとなり、大佛の造工せらるゝにつき、緣をむすばんためと方々より百姓來り芝土ほり、むかしのことゝなり

けり。

と記されてゐる。一方佛體の修理は鑄師彌右衛門國重によつて始められ、舊の如く御頭も鑄成せられ、元祿五年三月八日から三十日間一百口の僧侶を招請して開眼供養が嚴修せられた。事は勢によつて成るものである。公慶上人は更に知足院僧正隆光の執りなしにより、將軍綱吉に接近することを得、諸宗の有力者にも合力を求めて着々と工事は遂行した。寶永二年三月十二日と十八日に、長さ十三間の大虹梁二本を上げ、ここに大佛殿造營の見通しかついたので、同閏四月十日上棟式を執行した。よつて上人は工事進捗に伴ふ御禮のため寶永二年六月朔日南都を發足し、途中伊勢神宮に詣で、同月十四日江戸に着したが、その廿七日不幸痢病に罹り、七月十二日終に江戸に於て示寂した。遺骸は弟子等の願に依り南都に歸葬、五劫院に葬られた。公慶上人が大佛殿復興に從事したのは前後二十二年、殆どその半生をこれに捧げたのである。上人の歿後は弟子の公盛、公俊、庸州の三人が師の遺志を繼いで工事を完成し、寶永六年三月廿一日から四月八日まで盛大な落慶供養が行はれた。現在の大佛殿はかくして成つたものである。次いで淨土堂その他二三の堂宇が營まれ、又舊宇の修理等も行はれて、間もなく江戸の再興は了りを告げた。

明治維新とその後

寶永落慶以降さしたる事もなかつた東大寺に一大恐慌の時節が到來した。それは明治維新の變革による朱印地の上地と神佛分離、寺門改革の嵐であつた。諸侯の封錄奉還のため毛利家から年々勘渡されてゐた四百石が杜絶して經濟的破綻の一因を來した。

毛利家からの納米といふのは、文治年間東大寺再建の時、朝廷より東大寺に賜つた防長二國が慶安三年に毛利家の領地となつたので、その代償として納付されてゐたものである。然るにそれがなくなつてみると、東大寺は全く當惑するの外はなかつた。次は大勸進職名の廢止である。公慶上人の大佛殿再興以後龍松院に勸進所をおき、大佛殿に關する事項は大小となく處理してゐたが、龍松院からの數度の歎願も空しく、遂に明治三年四月「大佛殿は元來東大寺一山に關する伽藍なれば、大勸進職廢止後は寺祿を以て修理相續すべし」といふ奈良縣の通達に接した。山内の衆議區々となつて一決せず、御寺務宮の下知を仰ぐなどといふ事態にもなつたが、結局龍松院の申入れは認められず、兎角の事もあつて、明治五年十二月一日大佛殿は東大寺一山に引繼がれた。

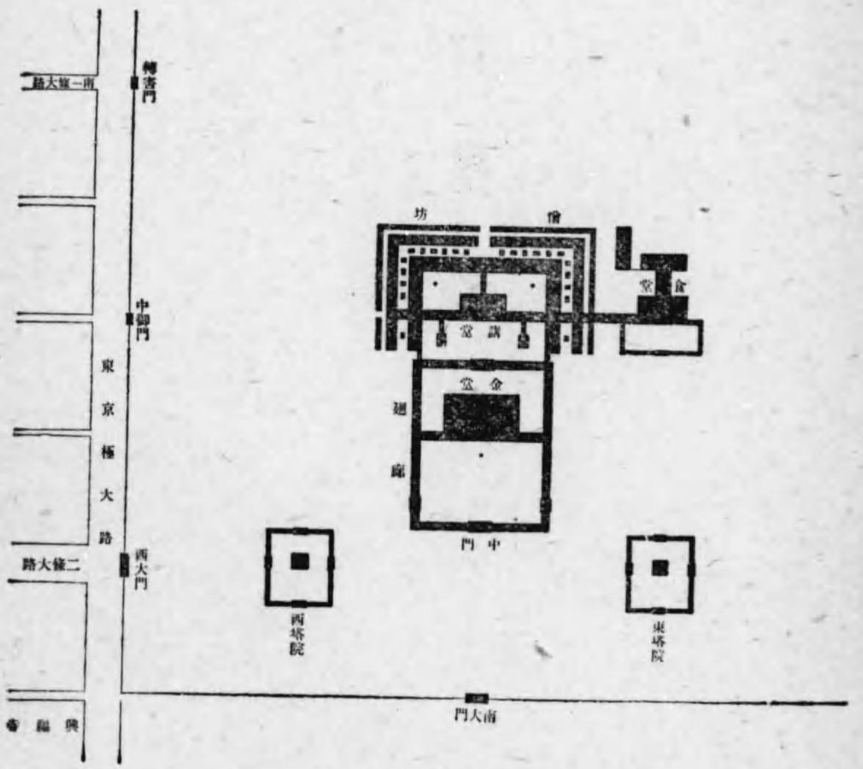
なほ寺地は明治四年正月五日付太政官布告を以て上地を命ぜられ、境内六十七町九畝十一歩を返上したが、その中の十一町三反二十六歩を新たに境内地に設定された。即ち境内は元の三分の一に縮小されたわけである。しかしそれはまだ良かつたが、明治廿二年二月その全域を奈良公園に編入されて東大寺の所有地は全然なくなつた。尤も翌廿三年地上管理は東大寺に委託されたが、最近に至り官有地の一部の無償還付を受け、堂舎の敷地は寺に歸屬した。一千二百年の昔を懐へば何といふ變り果てた世の有様であらうか。しかしこの舊寺地は徒らな改變に委ぬべきではないので昭和七年七月史蹟に指定せられた。

明治以降の歴史に於て特筆すべきは、明治十年二月八日、陸軍大演習のため明治天皇の行幸を辱うし、東南院が行在所となつたことである。東南院は前にも述べたごとく、元弘の昔後醍醐天皇が吉野潛行の砌、勤王僧聖尋僧正に迎へられて入御あらせられた由緒の地である。明治天皇御臨幸に際しては、有栖川宮熾仁親王は戒壇院に御宿泊になり、その他供奉の方々には塔頭子院に分宿された。翌九日は大佛殿へ行幸あらせられ、四聖坊にて正倉院の名香『蘭奢待』を截らせ給ひ、東南院へ還御遊ばされて千年の幽香を嘉賞遊ばされた。その時の御製に

わかみどり色もかはらぬ松が枝の　ときはかきはに末にほふなり

とある。この故に東南院は昭和八月十一月明治天皇奈良行在所として史蹟の指定を受けた。即ち東南院は後醍醐天皇行在所と明治天皇行在所との二重の史蹟指定を受けてゐるのである。

伽藍巡拜



東大寺伽藍復原圖

關野、天沼兩博士に據るが、但し僧房食堂等は正倉院古圖によつたものであるが、これは計畫案に過ぎなかつたらしい

寺觀の現況

以上の如く東大寺は聖武天皇の勅願によつて創建された本邦無比の伽藍であつたが、平安の末、平重衡の兵火に罹つて、豪壯な天平の結構を失ひ、まもなく再建された鎌倉の堂塔も、戰國の季世松永久秀の亂やその他の災害によつて失はれ、いまの寺觀は元祿年中公慶上人の復興せる大佛殿の一廓と幸ひに殘り存した一部の堂舍を守つてゐるに過ぎない。しかし五丈三尺の盧舍那佛は概ね昔ながらに在しまし、大佛殿は現在木造建造物として世界最大の偉容を誇り、廿二棟の國寶建造物と六十二件の國寶寶物とを擁してさすがに鬱然たる佛教文化の叢園である。

市内バスを大佛前で下車し、北行すること半町、吉城川の石橋を渡ると、目前に魏然として聳え立つ南大門が見える。道の兩側の松並木がその兩端を隱してゐるので、全構の眺めは得られないが、近づくに從つて大きさを增し、その巨大な結構は行人をして惹爾たらしむるものがある。

南大門を過ぎると前方に中門廻廊が見え、中門を越えて金色の鴟尾の輝く大佛殿の悠然たる大厦が望まれる。南大門から中門に至る右側には、寺務所(舊塔頭東南院)があり、鏡池があり、左側に

は寺務所と向ひあつて東大寺經營の圖書館・幼稚園・金鐘中學の一廓があり、鏡池の向ひには塔頭眞言院がある。鏡池の池畔に立つて東を望むと池の後方には植栽の淺い芝生が見えその中に土壇が見える。即ちそれが東塔址であり、西塔はこれと對稱に存したので、丁度眞言院の西裏に當つてゐる。

さて大佛殿を拜するには、中門の西の廻廊に拜觀口があり、そこから參入を許される。大佛殿を拜觀して中門の東廻廊の出口を出で、東に向ふと、丹塗の鳥居が立つてゐる、その傍の標石には手向山八幡宮の刻文が見られる。これを直行すれば手向山八幡宮へ到るのであるが、普通東大寺を巡拜する人々は廻廊にそつて北行し、廻廊の終るところ東行する石段を上つて大佛の大鐘と呼ばれる鐘樓の下に出る。ここには俊乘堂、念佛堂、行基堂の三棟が鐘樓を半圓形に圍んで並び立つてゐる。俊乘堂と行基堂との間の細道を下るとそこに大湯屋がある。鐘樓からはしばらく東行すると三月堂の前に出で、左手に二月堂が望まれる。三月堂と二月堂の西邊には多數の雜舍が並んでゐる。三月堂の前を南行すれば手向山八幡宮に至り、道はこれから若草山麓に出て春日神社へ續いてゐる。これが東大寺巡拜の普通のコースであるが、この他大佛殿廻廊の西方には戒壇院、勸進所、指圖堂があり、大佛殿の北方には松の疎林の中に講堂の殘礎が點在してゐる。講堂址の西北に白壁の土塀の見える一廓は正倉院である。講堂址の東隣には食堂址があり、食堂址の東及び北邊には塔頭寺院が並んでゐる。かの著名な轉害門に至るには正倉院の西邊の道を北行し、西折すれば達せられる。

ではこれからその各個についてみよう。

南大門

この門の創建がいつであつたかは、直接記錄の上からは示されない。天平勝寶八年勅定の東大寺四至圖に描かれてゐないことから考へると、當時未だ建立をみてゐなかつたらしいが、南大門といふが如き伽藍中央正面の主要な門であるから、その後遠からず建立をみたであらう。ところが建初の門は應和二年八月大風によつて倒壞し、後二百有餘年再建をみなかつたが、應保元年大僧正寛遍別當の時に至つて再建の機に會した。その後治承の災は幸ひに免がれ得たが、建久六年の大佛殿供養後、重源によつて新に天竺樣を以て造替せられ、正治元年六月上棟されたのがいま見る南大門である。重源の事蹟は既に述べたが、彼が畢世の力を盡くした大佛殿いまはなく、當時再興の他の堂舍も多くを存しない中にあつて、これは鎌倉の復興を物語る最大の遺構であり、重源の偉業が示される貴重な建築である。從つて又彼が鎌倉の建築界にもたらした新建築樣式――天竺樣（てんちくやう）の最大善美

なる遺構として日本建築史上に不拔の位置を占めてゐる。

昭和二年九月から同五年二月に亘つて施工せられた根本修理は、門の規格を再建當初の雄風に戻したが、この時の基礎調査の結果によれば、鎌倉の再興は舊礎・舊基壇の上に再興せられたもので、平面規模は創建のままであることが判明した。門制は五間三戸の重層門で、上層を入母屋造となし、下層の腰屋根と共に本瓦葺とする。門の骨格は十八本の大圓柱によつて組成される。圓柱は何れも徑三尺二寸、長さ七十尺といふ長大なもので、上下層を貫き、斗栱は上下層とも天竺様挿肘木による六手先を組み、特有の通肘木を廻らし、尾垂を配してゐる。軒裏は共に一軒、鼻隱板を打つて垂鼻を覆ひ、隅は扇垂となつてゐるが、かかる大建築でありながら、屋根の扱ひが輕快であるため、大建築にありがちな蔽ひかかつて來るやうな重苦しさはなく、東西百尺に餘る大棟はさはやかに半空を劃し、明快な風趣を持つてゐる。

門内に入れば長大な柱は矗々として上層に貫き、仰いで化粧屋根の特異な小屋組を見ることが出來る。柱の軒以上にはこれを繋ぐ貫が右往左往し、下層腰屋根の一部は内部に拔けて廻り縁のやうに垂裏板の一列を見せ、柱上小屋組は天竺様特有の大虹梁の上に丸束を立てて板蟇股・虹梁・貫等を巧みに配し、その間に例の鼻繰を隨所に散見させてゐる。この間昭和修理に挿入した補強鐵材がいささか目に立つのは遺憾であるが、何といふ横架材の氾濫であらうか。しかし、ここでこれらの横架材の氾濫には自らなる統制と秩序とが存し、その一つ一つはそれぞれ構造の必要に基いて機能されてゐることに留意しなければならぬ。

門の扉は失はれて藁座のみを存してゐる。いま柱に徑一寸位の圓穴が隨所に穿たれてゐるのは、中世の殺伐な合戰の日々に打ち込まれた矢丸のあとである。兩端間金剛柵の中には正面には金剛力士、背面には石狛犬を入れてゐる。

南大門は三國佛法傳通緣起によれば、平安朝には大華嚴寺の名額を掲げてゐたと云ふ。

金剛力士

金剛力士は南大門の上棟から四年の後、建仁三年七月廿四日大佛師運慶及び同快慶が小工十數人を率ゐて造り始め、同年十月三日に至つて開眼されたもので、事は東大寺別當記に見えてゐる。

兩像とも精密な寄木造の彩色像で——彩色は大方落ちてゐるが——高さ二丈六尺五寸、いまわが國に存する最大の木像である。りゆうりゆうと筋肉の盛り上つた裸體には、肩にかけた天衣や腰の衣が颯爽と靡き、四肢の力強い表現は空間を狹からしめてゐる。かかる巨像を何の破綻もなく彫みこなし、よく潤達の趣を備へてゐる點まことに敬服すべきものがある。

作者運慶は鎌倉彫刻界の巨星、快慶は運慶よりやや年長であつたが、同じく名だたる名匠である。當時兩人は東大寺・興福寺の復興に際して多數佛像を造立し、得意の絶頂にあつた。この像はその旺盛な製作力を發揮した貴重な作例である。なほこの力士像が吽形と阿形と面々相對してゐるのは特殊な安置法として注意される。金剛力士と云ふのは又二王とも云はれ、護法善神である。

石造獅子

東大寺造立供養記によれば、宋人字六郎等四人が建久七年に支那から石材を取寄せて中門の獅子、大佛殿內脇侍及び四天王像を造つたとあるが、この獅子の形式意匠は宋代遺物と揆を一にしたもので、宋人の作たること疑ふべくもないものであるから、舊中門の獅子であらうと考へられてゐる。角ばつた顎は異奇であるが、首を擧げ胸を張つた簡勁な姿態によく合つてゐる。臺座には四面に飛天と草花の浮彫があり、像も臺座ももとは彩色せられてゐたらしく、諸所にその痕跡をとゞめてゐる。

金堂院

廻廊に設けられた拜觀口を抜けて中門の內側に立つと、內院の廣庭を壓して大佛殿の全貌がある。正面七間、側面七間、重層天竺樣の全構は江戸期の遲鈍な意匠のため一種明晰でないものを感じられるが、豪快な挿肘木參差して深い軒を支へ、四注の屋蓋金色の鴟尾を載せて半空に湧出する偉容は壯觀といふも愚かである。下層腰屋根の正中には軒唐破風を構へて、その下には花頭窓が二つと兩折れの棧唐戸をしつらへた窓がある。しかしこれらのセントラリゼーションも全體があまりに巨大なため人目をひくことも少い。斗栱は上層は七手先、下層は六手先である。廣庭を進んで殿內に入り、先づ目を驚かす大佛を拜すると、再び今更ながら大佛殿の大きに驚かなければならぬ。天井は小組天井であるが、各部の手法は蕪雜の感が深い。

大佛殿の沿革については既に說くところがあつた。しかし創建並びに鎌倉再建の大佛殿はどのやうな營作であつたであらうか。

創建大佛殿の造營は、東大寺要錄本願章天平十九年の條に「大佛殿造事始レ自二今年一焉」とあるから、この頃からその準備にとりかかつたもののやうで、技術的に考ふれば、大佛の鑄造の終つた勝寶元年十月頃から組立に着手したものと考へられる。要錄に「勝寶三年建二造大佛殿一畢」とあるのが正しければ、近々二ケ年にして構作を畢つたこととなるだらう。續紀勝寶三年正月十四日の條に孝謙天皇東大寺に幸して、木工寮長上正六位上神磯部國麻呂に外從五位下を授くと見えてゐるのはその上棟の嘉賞であつただらうか。勝寶四年の大佛開眼の際には既に存したことは明らかである。又續紀によると、勝寶八年五月二日聖武太上天皇崩ぜられるや、七七日の翌日に當る六月二十二日孝謙天皇は勅して

明年國忌、御齊、應レ設東大寺、其大佛殿歩廊者、宜レ令六道諸國營造必會忌日。不レ可レ怠緩

と仰せられて、歩廊の造營を急がしめられたが、五月二日の御周忌には大工益田縄手は從五位下に叙せられてゐるから、豫定通り歩廊はこの齋會には竣成してゐたのであらう。しかし寶字二年二月・三月の頃には、内部の天井やその庇の天井を彩色せんとしてゐるから、これらの部分は御周忌までに間に合はなかつたらしい。從つて寶字二年頃を以て大佛殿の竣成期と見なければならぬ。

大佛殿の丈尺については先づ大佛殿碑文に

大佛殿一宇、二重、十一間、高十五丈六尺東西長廿九丈、廣十七丈、基砌高七尺、東西砌長卅二丈七尺、南北砌長廿丈六尺、柱八十四枝、殿戸十六間、天壺三千百廿二蓋、歩廊一廻、戸廿間、東西徑五十四丈六尺、南北徑六十五丈

とあり、七大寺巡禮禮私記には

大佛殿一宇二重高十二丈六尺、或云十二丈一尺四寸……七間四面、有二(裳)增一、仍二蓋下十一間中一間三丈、次左右四間各二丈九尺、次左右二間各二丈六尺、次左右四間各二丈二(三カ)尺、廿八本長各七丈、廿八本長各六丈六尺、廿八本長各三丈皆有末口徑□(三カ)尺本口徑三尺八寸、柱八十四本

繪

と見えてゐる。右のうち殿高については十二丈餘となすものと、十五丈餘となすものとがあるが、高さ十一丈の光背を入れるためには十五丈位なくては叶ふまい。又柱の大さについても巡禮私記が、大・中・小三種を各廿八本宛としてゐるのは傳聞の誤であるに相違なく、母屋柱として大廿本、その周圍の柱として中廿八本、側柱として小卅六本、計八十四本とすべきは云ふまでもなからうが、以上によつて創建大佛殿の規模を考へ得るであらう。

長元元年の檢錄文には大佛殿のことを「七間二重瓦葺金堂一宇」として上層に東西懸魚の存在を

記してゐるから、創建大佛殿は入母屋造であつたと考へられる。かの信貴山縁起を檢すると、尼公の卷に大佛殿の正面が端嚴雄大に描き出されてゐるが、これは諸家の既に指摘せられてゐるやうに治承燒亡前の創建大佛殿を描いたものである。それによると、下層の斗栱は三手先らしく、上下の長押の柱當りの部分や、尾樋、樋の木口には金泥を施して金銅金物で飾つた模樣が見え、端の間の小壁の柱上の左右には寶相花(花は赤、莖、葉は綠)を描いてゐる。これは法界寺阿彌陀堂や興福寺北圓堂の內陣の小壁の間斗束の兩側に描かれてゐる彩色文樣を想起せしめる。

何といふ豪華な殿堂の狀であらうか。

天祿元年の口遊に當時の巨大建造物を「雲太、和二、京三」と記してゐるが、これは高さを較べたもので、即ち最高が出雲大社(十六丈)、次が東大寺大佛殿、三番目が平安京の大極殿であると云ふのである。しかし建築量としては到底大社の及ぶところではないが、後世の例から考へると本邦最大の佛殿としてはこの東大寺の大佛殿も方廣寺大佛殿の高廿丈、桁行廿九丈五尺二寸、梁間十八丈三尺六寸に一歩を讓らざるを得なかつた。

鎌倉再興の大佛殿は創立の平面をそのまま踏襲したもので、その丈量は東大寺諸伽藍略錄に見えてゐる。又江戸の再建に當つても公慶上人は初め十一間・七間・重層の古制を追つたものを設計したが、實施に當つて正面は兩端三間づつを減じ、いま見るごとき七間堂となつたものである。

天竺樣を驅使して成つた鎌倉大佛殿の形狀は家原寺所藏の行基菩薩行狀繪傳に見え、公慶の計畫案はいま大佛殿內の東壁にかかつてゐる。なほ廻廊も鎌倉までは複廊の當初の規模で營まれて來たが、江戸の再建はいまみる單廊となし、大佛殿後ではそれを廢して石垣に代へた。しかし規模としては略ゝ舊に同じい。屋上の鴟尾は大正初年の修理に當つて添加したもので、以前は鳥衾瓦であつた。次に創建の大佛殿院と現宇との規模の比較を表示してみよう。

大佛殿

	創建 (括弧中は天平尺、上揭の數値は天平尺を九寸八分として現曲尺に換算せるもの)	現宇
桁行	十一間—二八六・二〇尺(二九〇・〇〇)	七間—一八八・四〇尺
梁行	七間—一六六・六〇(一七〇・〇〇)	七間—一六六・六〇
內車桁行	七間—一九四・〇四(一九八・〇〇)	五間— 八六・二四
內陣梁行	五間— 七〇・五六 (七二・〇〇)	五間— 七〇・五六
棟高	一五二・八八(一五六・〇〇)	一五五・八〇
基壇長	三一九・四八(三二六・〇〇)	二三三・三〇

基壇巾	二〇一・八八（二〇六・〇〇）	二〇二・四〇
基壇高	六・八六　（七・〇〇）	六・四五
柱數	八四本	六〇本
殿戸數	一六間	一〇間
建物面積	一三二四・四七坪	八七一・八七〇坪
基壇面積	一七九一・五七	一二五五・四四〇

中門廻廊

	創建（工学博士關野貞氏「天平創立の東大寺大佛殿及其佛像」―建築雜誌第一八二號）	現宇
歩廊南北徑	六五二・四七尺	三五七・六〇尺
同東西徑	五四六・九二	五〇五・〇〇
同梁間	三〇・〇〇	一九・五〇
南北中門長	九六・九三	三六・〇〇
同廣	三三・〇八	二五・六〇
東西中門長	五二・五五	三三・六〇
同廣	三二・〇八	一九・五〇

さて大佛殿の記述を了るに當つて、明治修理の際に須彌壇の内から鎮壇具が發掘されたことをつけ加へて置かう。これは修理工事の準備が漸く進んだ九月二日の事、足代架設のため須彌壇正面に直徑七八尺の壺掘を行つた際、地下一尺四五寸に至つたところ端なくも發見せられたもので、その日の收獲は次の遺物であつた。

金銀裝太刀―二口。銀製蠟形鑠子―一個。漆皮箱殘缺―十二片。

ところが越えて四日、壇上西南方地中約一尺五寸の箇所から

銀合子―一合。金銀裝太刀―二口。六花白銅鏡―一面。刀子殘缺―四片。水晶合子眞珠八顆入―一合。水晶合子眞珠五顆、水晶三顆入―一合。水晶玉―十六顆。琥珀玉―六十二顆破片若干共。瑠璃玉―百四十九顆。

其他を出し、更に翌十一年一月十四日大佛殿後方の柱礎下より

金銀裝太刀―二口。刀子殘缺―十片。刀干殘缺―十片。水晶玉―六顆。甲札殘缺―百八十五片。六方結晶石。其他玉石。

を出土したのである。永く土中に埋沒してゐたので無慘な姿となつてゐたが、その各部に遺存する文様意匠は、正倉院御物を措いては、また他に見ることの出來ない壯麗にして精緻を極めたもので

ある。ここにも大佛殿の貴さがあり、天平文化の豪華さがある。以上は一括して國寶に指定せられ、今奈良帝室博物館に出陳せられてゐる。

盧舎那佛

さて本尊大佛は高い石築須彌座の上に、右手に施無畏、左手に與願の印相を示して眞如實相大蓮華臺に住し給ふ。高さ五丈三尺五寸、御顔の長さ一丈六尺、目の長さ三尺九寸、口の長さ三尺七寸、世界最大の銅像である。しかし再度の兵火によつて、その都度佛頭は落け落ち、上半身は損はれ、いまの佛頭は元祿年中公慶上人の大佛殿復興に當つて補ひ作られたもので、蓮瓣と共に上半身はこの時の補鑄を受けてゐる。いま大佛を拜すると佛頭と下半身とでその金の色調を異にしてゐるのを見るであらう。從つて現在の大佛には下半身にしか當初の部分は殘されてゐないこととなり、天平の形相とは勿論大なる變改があるわけである。

蓮瓣の形狀は當初のままであるが、請花、返花とも全瓣十四枚、間瓣十四枚、計廿八枚中で當初のものは東南と西南の數葉に過ぎず、他は後の補鑄となつてゐる。元祿の際には十八葉の補修があつたと記されてゐる。石座はいまは平面廿八角形の花崗切石の壇上積となつてゐるが、延曆僧錄には

一重白石、高八尺、含花上鐸周卅四丈七尺、敷花周卅九丈五尺

とあり、この狀は信貴山緣起に描出されてゐる。

盧舎那佛といふのは華嚴經を說き給ふ報身の佛であることは旣に述べたが、猶この經によればその住する大蓮華臺には周遍に千葉あつて、その一葉が一世界になつて居り、一葉の世界の中に百億の須彌山、百億の日月、百億の南閻浮提があり、一葉の中には三千大千の國土を現じ、そこに盧舎那佛の化身たる釋迦佛があつて、十地の諸大菩薩のために說法し、且つ界中の百億の閻浮提の金剛座上には、釋迦佛の化身たる百億の小佛があつて、說法してゐると云はれるが、殘存する當初の蓮瓣を見ると、流麗な線刻を以てその千葉の蓮華臺を現じてゐる。

仍つていまその一葉をとつてその圖樣の說明を試みよう。

先づ中央上方に釋迦如來の海印三昧に坐したまふ相好を大きく現してゐる。それが上述の千葉上の釋迦である。佛の眉間よりは光明光を放ち、その光明の中に三十六軀の雲中化佛を現じ、釋迦如來の左右には三十二軀の菩薩が圍繞してゐる。葉上の釋迦の臺座の下は即ち大千世界である。橫に界線を劃して二十五段となし、各段の中に佛菩薩並に樓閣を並列して描出し、各々慾界、色界、無色界を表示してゐる。而して界線を綿密に見て行くと、頂上の方は界線のみで佛像も樓閣も表現さ

れてゐない事がわかる。これが即ち無色界である。それより下方に色界、欲界と見別けられ、最下方の欲界の部分になると所々に縦線によつて切斷せられた部分を見る。欲界の下には圓く蓮瓣がきざまれ、その中に須彌世界を現じてゐる。そしてこの蓮瓣は海中から出てゐる。須彌世界をよく見ると、頂上は忉利天で、そこには喜見城があり、それが帝釋天の住居である。忉利天の下は四層よりなり第四層目に四天王が住する。また須彌山の周圍には七金山があり、七金山の外周には四洲があり、四洲の外に鐵輪圍山がある。須彌山と七金山と鐵輪圍山とを併せて九山と稱へ、九山の間には海があつてそれを八海といふ。四洲の中の南方贍部洲の上方に無熱惱池を、その下方に菩提樹下に説法する釋迦三尊を表してゐる。これが百億の小釋迦を象徴してゐるのである。更に須彌山の左右に日月を、海中に龍を刻出してゐる。何といふ莊嚴の華麗さであらうか。

佛教史家はこの大佛造顯が國分寺の建立の直後に行はれ、國分寺の本尊は釋迦であり（藥師の例もあるが）、東大寺の大佛がかかる華嚴の教主たる盧舍那佛であることから、諸國の國分寺の釋迦像は一葉上の大釋迦を表したもので、天皇はわが國土を以て蓮華藏世界と考へ給うたものと説いてゐる。即ちこれに依れば國民を百億の小釋迦と見、元首たる天皇は盧舍那佛の座につき給うたもので、換言すれば、大佛は實に天皇の理想的表現であつた事とならう。ここに理想と現實との照應がある。

從つてこれを表示すれば

理想　盧舍那佛（東大寺）―葉上大釋迦（國分寺）―百億の小釋迦

現實　天　　皇―諸　國　國　司―國　　民

となり、東大寺が總國分寺であつたと云ふことは歴史的に根據を有するものではないが、この考察にして正しければ、東大寺が總國分寺たる意義を有したことは認めなければなるまい。

しかし七大寺巡禮私記を見ると、この蓮瓣は勝寶四年二月から八年七月までの間に鑄成され、勝寶九年三月廿九日附の寫書所食口帳（大日本古文書、一三）等によれば、寶字元年頃に至つてこの圖樣の刻入があつたらしいので、最近家永三郎氏はこれを聖武天皇追福の淨土變として梵網經に基いて造顯されたものであらうと説かれた。（史學雜誌第四十九編第二號）

しかし何れにしてもこの線刻は奈良朝の繪畫的遺品として貴重な作例である。

光背は江戸の補加であるが、當初のものは大佛殿碑文に「圓光一基、高十一丈四尺、廣九丈六尺」とあり、信貴山緣起に見ゆる如く身光も頭光も同形であつたらしく、巡禮私記はこれに「有三五百卅六軀金銅菩薩坐像」と記してゐる。

この大佛の丈量は歴史的には方廣寺の大佛殿の本尊の木彫十六丈には比ぶべくもないが、現在か

る大きな佛像を佛殿内に仰ぎ得ることは世界稀有である。但し支那山西省大同にはこれより少し高い佛像はあるが、いまは露座となつてゐる。

當初の脇侍は碑文に

挾侍菩薩二軀竝塞、高各三丈……四天王像四柱、高各四丈、各下在二鬼形一體各体長二丈六、(伏)カ尺、高三尺捻

と見え、巡禮私記に

金色捻菩薩坐像二軀體丈各三丈皆坐三八角須彌座一、各□□□(跌カ)金色蓮花、左觀世音菩薩像尼信勝之願也右虚空藏菩薩像、頂有卅五化佛尼善光之願也、斯二菩薩、中尊石座之外、別坐三須彌座一、在三垂裳一、四天王捻立像四軀高三丈七尺或云四丈同像足下鬼形等臥長二丈八尺、高三尺

とあり、脇侍は乾漆らしく、四天王は塑像であつた。鎌倉の再興には定慶・快慶・康慶・運慶等鎌倉佛師の名匠の奉仕によつて木彫とされたが、江戸に於ては木彫の脇侍（左脇侍如意輪觀音像、右脇侍虚空藏菩薩像）のみを作り、四天王はいまみる如く内二天は首だけの造顯でやんだ。

金銅八角燈籠

大佛殿前の金銅八角燈籠こそこの大佛殿院に於て唯一の天平を想見し得べき遺品である。總高十三尺、素晴らしく大きい火舍がこの燈籠の堂々たる風貌を特長づけ、その八面には流麗な浮彫のある扉を入れてゐる。浮彫には伎樂菩薩と飛獅子とを交互に用ひてゐるが、伎樂菩薩の圓滿な面相、樂しげな姿態、飄轉する綬帶の狀は天平盛期の特色を表して遺憾ない。飛獅子はわが國の工藝圖樣として甚だ多い作柄ではあるが、その中にあつて、この秀拔さは截然として他の追從を却けてゐる。火舍は八角の竿によつて支へられ、上に同じく八角の笠を載せ、寶珠を戴く。火舍受の八角座周邊には線彫で花文中に奏樂の天人像をあらはし、それらの間は魚子（ぎょし）を以て埋められる。棹の八面は寶相花（ほうそうけ）蔓草文樣によつて飾られ、上下緣の中を上下二段に劃し、その各個に竪罫を引いて、上段には菩薩本業經、阿闍世王受決經、業報差別經を刻み、下段には施灯功德經、業報差別經の中から奉燃燈・奉香花の功德要文を拔萃して鐫刻してゐるが、その書法からこの竿は鎌倉の補加であらうと見られてゐる。寶珠には

康和三年歳次辛巳十一月二日己未

別當前權律師永觀修造畢

の刻銘があつて康和の補加であり、又南側の飛獅子の扉もその手法の上から鎌倉時代に於て補はれたものと云はれてゐる。近くは寛文八年十一月、金屋彌左衞門によつて修理を加へられてゐるが、これは永祿の兵火にかかつた爲めである。

東塔院址・西塔院址

東西兩塔の位置は先きに述べたが、それは金堂院のそれぞれ斜前方に當つてゐる。共に土壇を殘すに過ぎない。東塔は張芝美しく整正せられ、礎石は留めないが、南面の石階阯東脇には松香石の羽目石を存してゐる。西塔址は壇上數本の松既に老い雜草の中に空しく礎石の掘取り穴を存するばかりで、東塔址と同樣もはや礎石を存しない。

東大寺の兩塔は七重の大塔婆でそれに廻廊を繞らしてゐたので、それらの一廊は共に院號を附して呼ばれてゐた。廻廊址は兩塔共にその地形を僅かに存してゐる。

兩塔の造營に於ては、西塔の方が先に竣成したらしく、要錄第四に「天平勝寶五年閏二月廿三日建」とあるが、同年には閏二月はなく、更にこの前後で閏二月を持つ年はない。しかしその前年には閏三月があるからこれは「天平勝寶四年閏三月三日建」の誤りではないかと說かれる。

東塔の造營については比較的精細な工程が要錄に散見されるが、その着手は西塔の構作の終つた勝寶四年頃からであつたらしく、同五年三月立柱、同六年內外の莊嚴を施し、相輪の鑄造を行ひ、

同七年には廻廊の工事に及び、同八年相輪を構上し、相輪の中に金字宸勝王經一部、佛舍利十粒を安置し、恙なく竣成を告げてゐる。要錄これによれば前後四ケ年を要してゐるわけである。西塔の造營着手は所見されないが、東塔の工作期間から推定すれば、勝寶元年頃ではなかつたらうか。

かくして構設を了へた東西兩塔について、平安朝初頭に作られた大佛殿碑文は

塔二基並七重東塔高卅三丈八寸、西塔卅三丈六尺七寸、露盤高各八丈二寸、用熟銅七萬五千五百二斤五兩、白鑞四百九斤十兩、錬金一千五百十兩二分

と記してゐるが、共に卅三丈に餘る驚くべき高さを持つたものであつた。これは大佛殿の高さの二倍に餘る數値である。大佛殿を仰いでさへ驚嘆の眼を見はる現代人は、この東西兩塔の雄風をよく想像することが出來るであらうか。

大正の初年には未だ兩塔址ともに幾つかの礎石を存した。それに基く天沼博士の研究によれば、初層平面寸尺は方五十五尺、中央間二十一尺、兩脇間十七尺、廻廊は正面二百五十尺、側面二百八十三尺七寸五分、正面を複廊、他の三方を單廊とし、各面にはそれぞれ桁行四間の門を開いてゐたいふ。東大寺東塔院及西塔院址—奈良縣史蹟勝地調査會報告書第五回

西塔は承平四年十月十九日雷火に燒失し日本紀略、その後の再興に於ては天德三年七月二重目迄扶桑略記

を構立したが、遂にもう一重だけを作つて三重とされた儘で長保三年燒失し（要錄卷四、和漢春秋曆）、建治の頃再建の企もあつたが（續史愚抄）實現されずして今に至つたものである。

東塔は幾度かの修理によつてよく保たれてゐたが、治承の兵火に類燒してしまつた。その後元久元年四月再興の事始めを持ち、承元二年立柱があり、貞應二年三月九輪を擧げ嘉祿三年には步廊まで落成して再興をみたが（三長記、百練抄）、康安二年五月の雷火に罹災した。（嘉元記、興福寺略年代記）その後應永五年に再興の企てあり、立柱まで行はれたが、（後鑑、南方記傳）工を遂げずして廢絕した。

講堂院址

大佛殿後の松林の間に巨大な礎石が點在してゐる。これが講堂の遺阯である。僧坊はこれを圍んで存し、いまも地形にそれを察せしむるものがある。

講堂の造營は大佛殿の工事が大體終つてから着手された模樣で、天平勝寶五年正月廿日付の「造講堂院甲可山作所解」（大日本古文書三ノ六一七頁）は材木を作るために墨繩二十條と墨五挺とを請うてゐるから、當時講堂の用材が甲賀山で伐採されてゐたことを示してゐる。勝寶七年の考中行事を申せる造講堂院所の解文（大日本古文書一三ノ一五七—八頁）によれば、その頃東大寺に於ける工事現場で講堂と僧房との用材を削り立てて講堂の造立が行はれてゐたらしく、要錄に引く延曆元年の新檢記帳によると、勝寶七年十一月に勅願として講堂本尊たる乾漆の千手觀音立像（高二丈五尺）が作り始められたとあるから、勝寶八年頃には講堂の造營も終結を告げてゐたものではなからうか。

造東大寺司の告朔解によると、寶字六年二月中に單功九十一人を要して僧房の瓦と壁とを修理してゐるから、僧房の一部は早く成つてゐたことがわかり、同三月中に單功二十三人で僧房・經藏を作り、單功六十三人で僧房の間度（まわたし）並に棧を作つたとあり、同四月中には單功五十八人で僧房の略壁木を作り壁を塗つたとあるから、僧房はこの頃までも完成してはゐなかつたらしく、寶忠廿九箇條には寶忠が寺家の造瓦別當であつた時（寶龜十一年から延曆元年までの三年の間）、瓦十九萬枚を作つて僧房の用に充てたとあるから、この頃漸く功を終つたのであらう。

その規模は新檢記帳に次の丈尺が擧げられてゐる。

講　堂　一宇長十八丈二尺　廣九丈六尺

軒　廊　一宇長六丈　廣三丈八尺

僧房四宇　一宇長二十七丈七尺、廣四丈六尺　二宇各長十二丈七尺、廣四丈六尺　一宇長十七丈六尺、廣同前

從つてこれによれば、嘗て天沼博士によつて紹介された正倉院御物の講堂・僧房・食堂あたりの平面圖は創立當初に於ける東大寺南大門東西兩塔院及び其沿革、附講堂、僧房、金堂建築雜誌二八三號、明治四十三年七月　講堂以外はこれと合致しないやうであるから、恐らく計畫圖であらう。

延喜十七年十二月講堂と僧房とを全燒せしめたが、同月の三善清行の奏狀に「此蚤冬東大寺失火、燒三講堂、僧房百餘間」とあり、扶桑略記には「東大寺講堂一宇十間立三面僧房一百二十四間燒亡」と見え、日本紀略にも「東大寺講堂一宇、僧房一百二十四間燒亡」と記されてゐて、この僧房百二十四間は、新檢記帳の東西僧房各二十一間(馬道二間を加へて)、北僧房二宇各十間、計六十二間と合はないから、延曆から延喜の間にこの側方に各小子房が建て加へられたものと解せられる。

延喜の燒失は承平五年五月の再興供養によつて復したが、再建の講堂は東西に軒廊をもち、東西北に僧房があり、東西の僧房からは軒廊に連る馬道があり、この廊が大佛殿の北廊の北へ接してゐたらしく、多少前とは相違があつたやうであるが、これは治承の兵火に燒けた。その後しばらく再建に至らなかつたが、漸く嘉禎二年十一月に立柱があり、三年四月上棟を行つたと傳へられる。僧房は仁治三年から着手され、その竣成したのは建長六年頃であつたらしい。然るに永正五年三月

共に燒失し、再建の企もあつたが、遂に成らずして今日に至つたもので、西僧房の礎石は先年大佛殿の西北隅より正倉院への通路を改修する際に多數發掘され、今は南大門脇の圖書館前庭に移されてゐる。

食堂院址

食堂院は正倉院の伽藍計畫圖にも示されてゐる如く、講堂院の東邊に於て營まれた。いま講堂址の東の一段高い地勢に平夷な荒蕪地が存し、塔頭寶嚴院の前の道路上に一箇の巨大な礎石を存してゐる。

『食堂所』或は造食堂所の名稱が正倉院文書に見えるのは寶字二年以降であるから(大日本古文書十四ノ一三頁、二一五頁)恐らく講堂の造營後に着手されたものであらう。いまそれによると寶字六年二月中に單功三百十一人を要して「食堂軒廊一宇」を、同三月中に單功百七十人を要して「食堂近廊材百四十物(柱並柱貫、鴨柄、肱木之類)」を、單功二百四十人を要して「食堂材百八十物(丸桁、品之類)」を、同四月中に單功五百五十八人を要して「食堂廻廊雜材三百四十五物」を構作し、單功十四人を要して「食堂院板屋」を修理した

ことが見えてゐる。寛和二年の「太上法皇御受戒記」には食堂内の東西に各六列の長床を並べ、それに一千の僧が着して熟食を受けたとあるから、以て食堂の規模の廣大さが想像されよう。長元元年の檢錄文には瓦葺十一間四面庇食堂一宇、北三間瓦葺軒廊一宇、瓦葺七間二面食殿一宇とその規模を記してゐるが、これは御物の圖と合はず、やはり圖の食堂院も計畫案に過ぎなかつたやうである。巡禮私記に

碾磑亭一宇、七間瓦屋、置碾磑、件亭在講堂東食堂之北、其亭内置石唐臼是云碾磑、以馬腦造之、其色白

と見える碾磑亭はこの食殿に相當するものである。

食堂や亭屋は治承の兵火に燒失してから遂に絶え、貞和の頃に食堂には再建の企もあつたが實現を見るに至らず、現狀の廢址を致した。

正倉院

大佛殿の西側の道に立つて北を望むと白壁の築地が見える。それが正倉院である。いまは宮内省の所管に屬してゐる。正倉院とは正倉—主なる倉のある一廓といふ意味である。されば正倉若しくは正倉院は東大寺に限らず、他の寺にもまた諸官衙にも存してゐた。しかし現今他に正倉も正倉院も遺つてゐないので、正倉院はいま東大寺正倉院の固有名詞の如く使はれてゐる。さて東大寺正倉院がいま吾々に感じられるやうな國家的存在となつたのは、天平勝寶八歳六月廿一日、聖武天皇の御七七日の忌辰に當り、光明皇后によつて御願文と目錄—東大寺獻物帳—とを添へ、先帝御遺愛の品々を東大寺に施入あらせられ、この架藏に當てさせられたに始まる。しかし東大寺の正倉がそれ以前から存したものか、この御施入により成立したものかは詳かでないが、いまの御倉の異常な規模から考ふれば、その建築はこの事のために作られたものの如くである。

御倉の構造は所謂三倉造りで、床束で數へて桁行九間一一七尺、梁間三間三二尺、内部は北・中・南の三倉に分たれ、各倉はそれぞれ二層にしつらへられてゐる。屋蓋は寄棟、本瓦葺で床高九尺、軒高廿七尺五寸、軒出十四尺、總高四十三尺五寸といふ巨大なものである。北倉には東大寺獻物帳に記された聖武天皇御遺愛の品々を收藏し、中倉は獻物帳以外の主として御一週忌の際の獻物及びその際に皇族方より納められたもの、南倉は大佛開眼の供具その他の莊嚴具等が藏されてゐる。從つて古くは北倉と中倉とが勅封倉であり、南倉は綱封倉であつたが、明治に入り御倉が宮内省に獻納され

るに及んで、南倉も勅封倉となつた。勅封倉といふのはその開扉に當つて勅許を要するもの、綱封倉は三綱所管の倉をいふ。架藏品には度々の出藏があり、又盜失もあつたが、御施入以來一千二百年の星霜を閱し、大佛殿の罹災二回を數へる中に、無事傳世せられていまに存するを得たことは、一に尊貴なる國體の然らしむるところではあらうが、また奇蹟的な事實でもある。

御物の種類は極めて多岐で、文書、文具、樂器、調度、衣服、服飾品、武器、武具、樂器、藥品、佛像、佛具、經卷等枚擧に遑ないが、その數量は正倉院御物御棚別目錄によれば七九四點まで附號せられてゐる。しかしこれらの一點に含まれる數量を通計すると、その總點數は約五千數百點に達するが、なほこの內譯に於て多數の箇數を含んでゐるので、その實數は尤大な數値を示すやうである。いま假りに玉類についてみれば、完全なるもの又完全に近いものだけで六萬九十を算すると云ふ。次にこれら御物の製作年代であるが、御遺愛の品目には傳世品も交つてゐたので、極めて廣い巾を持ち、石田茂作氏の正倉院御物年表によれば、紀年銘の存するもの二百五十點、古きは文武天皇慶雲四年在銘に始まり、新しきは稱光天皇應永廿年在銘品に及んでゐるが、そのうち二百六點迄は正しく奈良時代銘であるから、その大多數は當代の遺品と考へて差支へない。天平と云へば大唐の文化の攝取によつて世界的氣宇に飛躍したわが國上代文化の精華であるが、特にこれはその輝かしき御代をしろしめし給ひし至尊の什物であるから、その貴さは云ふも愚であらう。從つてこの御物は單に我が國文化の精華と云はれるばかりでなく、世界の至寶と云ふも決して溢美ではない。よつて宮內省ではこの寶庫を守るべく周圍二萬餘坪の御料地を設定し、あらゆる災害から萬全の防衛策を樹て、每年十一月曝凉檢閱を執行されてゐる。この際少數の有資格者及び宮內大臣の特に許可を與へた者のみに拜觀を許され、一般の渴仰者はこの光榮に浴することが出來なかつたが、昭和十六年皇紀二千六百年に當り東京帝室博物館に於て一部の展觀を行はせられたことは、いまなほ吾々の腦裡に鮮かである。

現在では正倉院內に正倉一棟が存されてゐるだけであるが、要錄によると平安中期頃には西行第一倉、北倉、東行第一倉、東行第三倉等の諸倉があつた。いま構內には、正倉の他に古建築としては正門右側に一宇の佛堂—舊四聖房本堂があり、正倉南方に一棟の校倉—聖語藏を存してゐる。

聖語藏には天平の古寫經類を多く收藏してゐるが、もとこれは地藏院（現在廢亡してなく、正倉院の西南、轉害門東側の鼓坂國民學校敷地がこれに當る）に存したもので、正倉院と共に東大寺から宮內省に獻上された際、現在の位置に移されたものである。

四聖房は東大寺創建の四聖として聖武天皇、行基菩薩、良辨僧正、波羅門僧正を奉祀したところ

で、御料地編入に際して正倉院構内に入り、建物も宮内省に移管されたものである。

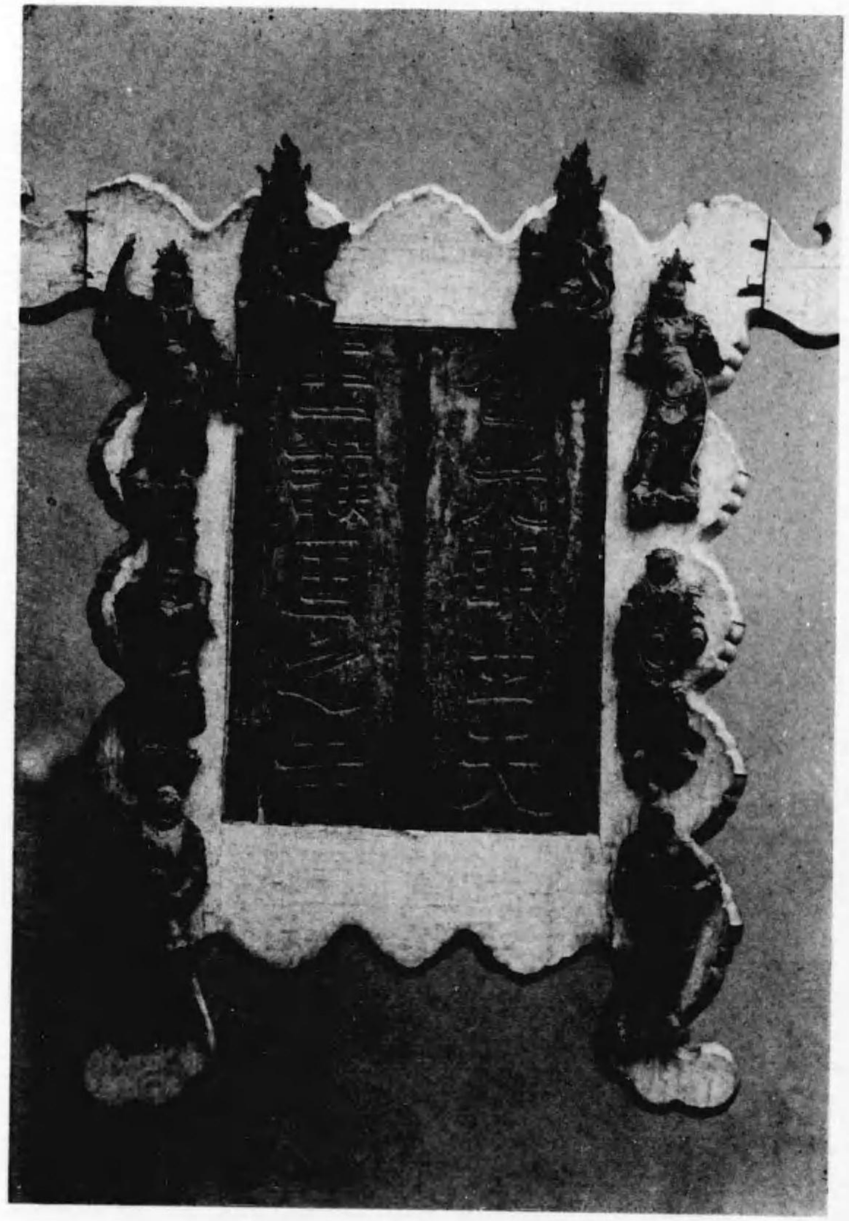
西面の諸門

東大寺の西堺は平城京の東京極大路に面し、これに勝寶八年の四至圖に見る如く、三つの門が開かれてゐた。即ち南より西大門、中御門、（圖には中門とある）轉害門（圖には佐保路門とある）これであるが、西大門は二條大路に、轉害門は南一條大路に、中御門はその名の示す如く南一條と二條との中間の小路に對峙したものである。西大門と中御門はいま殘礎を見るのみであるが、轉害門は現存する。

西大門

西大門は勝寶の圖にも特に「東大寺」の註記がある如く、東大寺當初の正門であつたと考へられる。創立は知られないが、七大寺巡禮私記、三國佛法傳通緣起、東大寺具書、多聞院日記等によつて知られるやうに、いま奈良博物館に出陳する「金光明四天王護國之寺」と刻する古額を掲げてゐた。

天正十一年三月三十日、大風による顚倒（多聞院日記）をもつて退轉してしまつたが、その規模は南大門



東大寺西大門遍額

よりやや小さかつたらしく、額はその後寶藏に收められてゐたものである。

門礎は伊東博士の大和紀行明治二十九年に

雲井坂、坂の左手には東大寺西大門の礎石、整然として今も亂れず殘り居れり

とあるから、明治中葉までは整然と存したやうであるが、今は僅かに二箇を存するに過ぎず、それも移動してゐる。七大寺巡禮私記にこの門について

又此門爲大和國國分寺仍所當佛事於此內勤修之故號國分門而將門自此門出者之後自天慶以來開扉于今令不開

とある。將門の話は俗說に過ぎないが、この門に於て大和國國分寺の佛事が行はれ、それによつて國分門と稱せられたとあることは注意される。東大寺は大和國國分寺の役割をも持つてゐた。それは西塔を中心としてゐたと考へられるが、ここに國分寺の佛事がこの門に移されたとあるのは、恐らく西塔燒失の承平以後の事であらう。

古額　高さ九尺五寸、額面の文は五字づつ二行に刻られ（この故にこの額は十字の額とも云はれる）、これに額緣がつき額緣には八軀の佛像を飾つてゐる。佛像は上の二體が梵天と帝釋天、その下の左右二體づつが四天王、最下の左右二體は金剛力士所謂二王であるとされてゐる。

額面の刻字のある板はいまは木地を表してゐるが、仔細にみるともとは布張漆塗であつたらしく佛像には彩色があつた模様で、上の佛像には極彩色や截金が殘つてゐる。像は寄木造、内刳がある。刻文のある板は天平のものと見られてゐるが、額縁と佛像とは鎌倉の補作である。

なほこの額はいま勅額と稱し諸寺縁起集に引く縁起文に

勝寶二年歳次庚寅二月廿二日、太上天皇・皇帝・太后、共雙鳳輿親臨伽藍、於是割五千戸而封之、分奴婢二百口而入、仍定其額以爲金光明四天王護國之寺

とあるので、その製作を勝寶二年に置かうとする考へもあるが、この行幸の日付は續紀と合はず、これには遽かに信じ難い點がある。しかしまことに東大寺の正門を飾るにふさはしく雄偉な額である。

中御門

いま燒門と稱へられてゐるが、これは慶長十年二月晦日燒亡坊目遺考して以來の俗稱で、この門の創立、沿革は詳かでない。いまも礎石を完存し、これによれば轉害門と同一規模であつた。

門の内側南脇に、天平勝寶六年、聖武天皇御受戒の際、天竺祇園精舍に國王臨幸の式を模して大佛を三拜せられたと傳へられる石壇があり、御拜壇又御拜石と云はれる。諸伽藍略錄 後白河法皇も同じくこの石壇に上らせられ大佛を拜し給うたといふ。

轉害門

天平の建築は雄健であると云はれるが、吾々はその適例をこの門に於て見ることが出來る。前述の如く、この門は勝寶の四至圖に「佐保路門」と記されてゐるが、これはこの門から始まる舊平城京の南一條大路が佐保路と稱へられたからである。轉害門と通稱する所以は、東大寺鎭守手向山八幡宮の轉害會がこの門を御旅所として執行されるからであり、門の正面にふとい標繩を引いてあるのはこの神事の行はれることを意味する。

又この門には景清門の俗稱もあるが、これは建久六年梶原景清が大佛供養に參向した源頼朝をこの門に潛んで窺つたからだといふ。しかしこの話柄は和州寺社記に

手蓋町東大寺西の方町筋八町の間を云へり、則手蓋門とて東大寺の裏門有、古小野小町乞食せし時、此門に住みたりなどと語り傳へし。

と見える小野小町式の巷説に過ぎない。

なほ轉害門には碾磑門の文字を充てる場合もあるが、これはこの門の東に唐渡來の碾磑を置いた唐臼亭があつたからだともいふ。七大寺巡禮記 いま手蓋門、手貝門、手搔門の文字を宛てるのは明らか

に借字である。建築は石基壇上に立ち、三間一戸の八脚門で、屋根切妻、柱上斗栱は出三斗、軒は二重繁棰で、その飛檐棰は角材、地棰は丸形といふ天平建築の特徴を表し、天井は化粧屋根裏を露した三棟造である。二重虹梁蟇股式の妻は美しく、この蟇股の形式は他に類を見ない極めて珍しい形式である。正面の床面に四個の石が置かれてゐるのは、轉害會の神輿を安置するためで、其の直上には組入天井を張つてゐるのは神輿に敬意を表したものであるが、これらが何時頃しつらへられたかは明かでない。然しこの門の手法を仔細に見ると、斗栱部に於ていささか後世の濁りを發見するであらう。即ちそれは側の斗栱に於て出組の斗・肘木と壁付の斗・肘木とが形式を異にしてゐることであり、右の通肘木に天竺様の刳型の見られることである。即ちこれは鎌倉期に修理を蒙つたことを物語るものである。しかしその時期は明らかでないが、昭和修理に於ける調査によれば、古くは斗栱は平三斗であり、鎌倉修理が出三斗に改めたものと云ふ。從つて門の高さは當初より些か高まつたこととならう。

天平の八脚門の遺構としては、なほこの門以外に、法隆寺の東大門が殘つてゐる。しかしその剛健な風格は到底法隆寺東大門の及ぶところではない。

鐘樓あたり

大佛殿の東廻廊に沿つて北行すると、廻廊の終るあたりに東行する石段があり、それを登り詰めると目前に奇古なる鐘樓の峙立が見え、附近に二三の堂宇がある。大佛の大鐘として古來著名な銅鐘はここに存する。鐘樓の北西にあるのは俊乘堂、北東にあるのが念佛堂で、兩者の中間北寄にある小宇は行基堂である。行基堂の前からは馬醉木の茂みを北行する道があるが、これを下ると池を前にして大湯屋がある。

鐘樓

大鐘の鑄造は大佛の鑄成が略々終つた翌年の勝寶二年五月から着手し、同三年十二月に鑄造を企てたが成らず、同四年正月再び下形を作り、同閏三月七日鑄成し、四月八日寺家に行幸を仰いで、始めてこの鐘を懸けたと南都七大寺巡禮記に記されてゐる。しかし四月八日に東大寺が行幸を忝うしたことは、續紀にも、要錄の供養章にも、見えないから疑ふべきであるが、東大寺寫經所の文書に、勝寶四年閏三月一日から廿日までの間に延人員にして、書生一人、經師十六人、裝演二人、枝

生一人が鑄鐘所に出仕したことが報告されてゐるから大日本古文書、三ノ五六八頁、鑄成その他の年時は信憑するに足るやうである。從つて鐘堂が建てられたのも勝寶四年の頃であつたであらう。その後鐘樓は永祚元年八月十三日大風によつて倒壞したが、まもなく再興を見た。大鐘はその後地震のため少くとも延久二年十月、永承元年十一月、治承元年十月の三回に亘つて墜落を喫した。治承四年の重衡の兵火には幸ひに被害を免れたが、樓は承元年間二代目大勸進榮西によつて造替せられた入唐緣起。これが現存の鐘樓である。

榮西は唐樣の輸入者として知られてゐるが、この鐘樓を見ると、唐樣と天竺樣との巧緻なる結合によつて構設されてゐる。從つてこれは天竺樣の創設者重源の遺業を繼いだ彼の立場をよく物語つてゐる。

樓は方一間、單層、入母屋造、本瓦葺であるが、頑丈な軸部の木割は、この大鐘を懸けるにふさはしく、地貫、胴貫、頭貫の貫端は柱を拔いて、且つその先に天竺樣特有の繰形をつけてゐる。まことに奇な意匠であるが、天竺樣ではかくの如き手法も慣用であるらしく、開山堂の內陣柱も、いま床下になつてみられないが、やはり地貫はかくの如くであると云ふ。斗栱は殊に珍らしい組成を持ち小形で密接する卷斗は一木から刻み出され、唐樣の組上げとなつてゐる。軒反りははげしく、爲めに丸桁に副木を置いて斬の反り上りに應じてゐるが、軒は二重で、端に鼻隱板を打ち、隅木は下端に天竺樣の繰形をつけてゐる。この唐樣と天竺樣との巧みな結合は他に類を見ず、東大寺鐘樓樣とも云はるべきもので、日本建築史上この建築の占める位置を不拔にしてゐる。なほこの設計に於て大鐘を吊るための工作に特別の意圖の拂はれてゐることを見逃してはならぬ。鐘はその後延應元年六月六日龍頭が切れて、墜落したが、直ちに復舊せられた。いま龍頭の吊鐵物に左の銘文があり、その修補を示してゐる。

延應元年己亥九月卅日鑄之大勸進法印行勇
大鑄師左兵衞尉延時
小工廿人

要錄によれば、この大鐘鑄成の所用熟銅五萬二千六百八十斤、白鑞二千三百斤と見え、高さ一丈三尺六寸、口徑九尺一寸三分、口厚三寸、現在本邦最大の法量を持つてゐる。撞座の複瓣蓮華紋の秀拔さ、全貌の雄偉な風格は奈良期鐘の隨一である。

念佛堂と俊乘堂と行基堂と

念佛堂は鎌倉樣式の堂であるが、建築的には大して見所はない。方三間、屋根は錣葺、正面一間

に江戸期に入つて附加した向拜がある。總圓柱、三斗組、中備は實肘木を載せた間斗束で頭貫、木鼻には天竺樣が見られる。

本尊は地藏菩薩像で、著色、寄木造、像高七尺二寸といふ立派なものである。胎內銘によると嘉禎三年法橋康清僧昇顯によつて、俊乘上人以下の尊靈追善回向のため造顯せられたことが知られる。即ち

大勸進上人
金剛佛子
慶正爲法界衆生平等□
法印康慶尊靈
法橋康清尊靈
法橋康清
悉尊靈十五名
嘉禎第三大霜月下旬造之

「東大寺寺中寺外惣絵井山林」の部分圖

大佛師　法橋康清
佛子昇顯
父母師長□

據造像銘記

さてこの堂はいま念佛堂と呼ばれてゐるが、これは江戸時代以降のことであるらしい。念佛堂は七大寺巡禮記に

淨土堂　號東大寺別所

東向三間四面堂號念佛堂安五智如來等也

と見え、淨土堂の別稱と知られるから、それは東大寺造立供養記に

抑當寺淨土堂。元是阿波國所建立也。願主彼國住人字阿波民部大夫重能也。但佛像等未終其功也。重能者清盛入道卽從。當寺燒失之乖將也。爲逆亂之長故。遂被誅戮畢、爲救彼等之罪根。此堂宇所建鐘堂崗也。安九體之丈六。勤萬人之念佛也。其佛未修其功。上人今加種々莊嚴。令遂供養畢。

とあり、重源上人の發願によつて東大寺燒打の旗頭阿波民部大夫重能並びにその一統の罪根を救はんがために建立せられたもので、九體の丈六作善集によればその一體を安置してゐた。

鐘樓あたり

ところがこの堂は多聞院日記や東大寺雜集錄所收の蓮乘院演淸記によつて知られる如く、永祿の大佛殿炎上に類燒した爲め、その佛事がいまの念佛堂に移され、その故にいまの念佛堂を念佛堂と稱するに致つたものである。この當初の念佛堂はいまの俊乘堂の位置にあつたもので、東大寺圖書館所藏の江戸初期と推定せられる東大寺境內圖を見ると、現念佛堂は地藏堂と記され、いまの俊乘堂の位置に堂礎を描いて淨土堂と註してゐることを見るであらう。俊乘堂は公慶上人年譜に所收の棟上ノ記に

俊乘上人影堂甚狹小而不足觀焉故欲改造久矣維歲寶永甲申適會上人五百年之遠忌因用大佛殿之餘材且募衆人之助力以新構方五間影堂蓋爲影前常轉天下安寧也若夫詣斯堂拜尊影篤信深敬者則現濟壽域當生淨土於是乎爲文揭諸棟上寶永甲申正月五日龍松院上人公慶謹記

とある如く、從來の俊乘堂狹少のため寶永元年公慶上人が造り構へたものである。いまそれを淨土堂と呼ぶのは舊來の呼稱を踏襲したものに過ぎない。

そしてここに狹少だと云はれる俊乘堂は前揭境內圖によると、いまの行基堂がこれに當つてゐる。舊俊乘堂は寬永年中井大和守正淸が造り改めたものである。從つて現行基堂は寬永の所建と知られる。方一間、正面に向拜を構へ、方形造の氣のきいた小宇である。堂內には厨子があり、行基像はその中にある。

俊乘堂は念佛堂より稍々大きく、五間三間の入母屋造で、南正面の中央間に向拜を附してゐる。俊乘上人の影像は堂內の六角厨子の中にあり、高二尺七寸程の彩色木彫像である。本像は鎌倉期の肖像彫刻としては屈指のもので、六十餘才の老軀をひつさげて彼の大工事を成し遂げた上人の不屈な風格をよく表してゐる。なほ堂內には他に木造阿彌陀如來立像(國寶)及木造愛染明王坐像(國寶)の鎌倉末期作立の佛像がある。(一八頁挿繪「重源上人」參照)

大湯屋

大湯屋の創建にも文獻的な知見はないが、僧房食堂と同じ頃に造立されたものであらう。現宇は延應元年に成れるもので東大寺續要錄、別當章、東大、寺別當次第、興福寺略年代記、その後應永十五年大湯屋扁額墨書、寬永元年、東大事年中行事記、大湯屋扁額墨書、寬政五年棟札、嘉永二年棟札、の修理を經たが、昭和十一年から十二年に亘る國寶保存法による根本修理は中世の濁りを一掃して堂制を明朗にした。

しかしいまの規模は創建東大寺の規模――特に僧坊、食堂等――に比して過小に過ぎるやうに思はれ、古くは溫室院の文字も見えるから、恐らく當初の規模ではあるまい。從つて位置も當初から

の位置かどうかは疑はしい。

堂は正面五間・側面八間の東西長大なもので、西を正面とする。屋根は正面入母屋・背面切妻である。應永の修理はかなり大規模に行はれてゐるので、正面の大虹梁やその持送りの繰型、手挟等は面白いものであるが、この時のものであるらしく、柱間には唐様の二斗を中備に置いてゐるが、これらもやはりこの頃のものであらう。内部は東・中・西の三室に區劃される。

浴室は中室にあり、東室は土間の火焚場である。浴室は方一間、正面に唐破風を備へた小さな密室で、内部は漆喰土間とされ、ここに鐵舟が置かれてゐる。鐵舟には横腹に

敬白
造東大寺大勸進
大和尙南無阿彌陀佛
建久八年丁巳閏……
豐後權守

の刻銘がある。□字は錆損していま存しないが、東大寺年中行事記元祿十七年二月廿四日の條の判讀文によつて補ふ 入浴の式はよく知られないが、火焚場にはもと二口の大釜があつて作善集ここで沸かした湯はこの鐵舟に差し湯され、人々は浴室内の土間にゐてかかり湯をしたものらしい。

三月堂

三月堂は東大寺に於ける最古の建築である。この堂の古く正しき名は羂索堂と呼ばれる。不空羂索觀音を本尊とする故である。又この堂では法華會が修せられるので法華堂の名もあり、三月堂とはその法華會が陰曆三月に行はれるからである。

東大寺の創立以前、この地に金鐘寺と呼ばれる古寺の存したことは先きに述べた前編第一章。三月堂はこの金鐘寺の一宇として營まれたものであつた。金鐘寺の創立は審かでないが、持統天皇の御宇には既に名の顯れた寺院であり、天平以降にあつては、大和の國分寺たるの位置にあり、皇后宮職の寫經所もここに置かれ、天平十四年からは大安・藥師・元興・興福・法隆・弘福・四天王及び建興(又は崇福)の八箇寺と伍して恒例の安居が行はれ、同十五年の最勝五經の轉讀には、この寺の儀式が天下の範とされたといふから、當時かなりな大寺であつたらしい。工學博士福山敏男氏、東大寺法華堂に關する問題、東洋美術二、そして三月堂は東大寺要錄によれば、大佛開眼に先立つこと二十年、天平五年といふ年に創められたと云ふ。しかしこれには幾多の疑問があり、櫻會緣起等によれば天平十八年後の二、三年

間に置かるべきやうである。

さて三月堂はいま正面五間・側面八間の長大な規模を持つてゐる。しかし、當時の規模は要錄に抄錄される永觀二年の分付帳に五間一面庇瓦葺正堂一宇、五間檜皮葺禮堂一宇と見えてゐるやうに五間・四間（分付帳が五間一面庇と記すのは些か不審）の本堂の前に五間・二間の禮堂を並置したものであつた。從つて現在の建物はこの本堂と禮堂とを合の間で續けて一棟となしたものである。しかし現禮堂は同寺文書に文永元年四月廿一日竈神殿に於て二月堂法華堂上棟のため仁王經の講說のあつたことが見えるから、文永元年頃に造替されたもので、從つて合の間の構設はその後にあつたものと考へられる。いま西側に立てば、合の間に於て禮堂と本堂との屋根が樋を以て取合つてゐる狀を見ることが出來、この建築の成立が如實に示される。そしてこの堂が美術史家の關心を惹いてゐるのは、實にかくの如く天平盛期の建築と鎌倉中期の建築とが鮮やかに合して一宇となつた統合と變化との美しさなのである。

この美しさを湛能するには四月堂（三昧堂）の軒下に立つて眺むればよい。

先づ堂の美しさは銀灰色の屋根瓦に覆はれた屋蓋と軸部との好もしい比例から直觀される。本堂の屋根は東西に棟を有する四注であるが、禮堂の屋根はこれに直交して南は入母屋に終り、のびやかな軒反りは譬へやうもない。軸部の白壁・扉・櫺窓の組合せは、たくまずして一種の階調を作り、勾欄附の廻縁は堂の足元を輕快にひきしめてゐる。

本堂は木割の大きい雄健な和樣であるが、禮堂は天竺樣を交へた溫雅な和樣であり、この細部の相違も三月堂の美しさの重要な要素である。しかしこの兩者の相違は、天平と鎌倉との樣式變遷が學ばれる好箇の對稱でもある。これを觀察するには軒下に近よつて見なければならぬ。

先づ軒から見よう。軒は共に二軒であるが、地垂と飛檐垂との割合を異にし、本堂の方が飛檐垂の短いことを見出すであらう。日本建築の飛檐垂は時代が降るにつれて長くなる傾向にあるのだ。斗栱は共に出三斗であるが、この構成の相違は著しい。本堂の斗は成が高く、肘木の下端は橢圓の半分を見るやうな緩やかな曲線を呈し、上に笹繰を持つてゐるが、禮堂の斗は成も低く、肘木の下端は先端だけを圓孤に近い曲線で處理し、笹繰はないが、天竺樣の繰形を持つ木鼻を配して賑やかな組成となる。中備の間斗束も禮堂のものは上に實肘木を下に承座を置いて豐かな裝飾性を表してゐる。扉の構へは本堂の方は板唐戸で長押に裝置されてゐるが、禮堂は棧唐戸を藁座を以て裝置し、互にその時代の通例に基いてしつらはれる。緣の下を見ると本堂には鼇腹が設けられてゐるが、古くは基壇であつた筈であるから、鎌倉の合體に際して廻縁をつけるべく改めたものであらう。なほ

本堂の中央間の櫺窓、背面の兩脇間の板唐戸構へはこの合體に際して設けられたものと考へられるが、これらを本堂自體の樣式に從つて作り構へられてゐることは貴い。普通古い建築に新しい增設を行ふ場合には、新形式を以て樣式の統一を亂すのが一般であるが、この工匠の意圖はあつぱれなことであつた。從つて三月堂は本堂と禮堂とそれぞれ異る時代の樣式を守つて、侵すことなく、又侵されることもなく、獨自の美しさを守りつつ一宇となつては又一つの美しさを合成してゐるのだ。何といふ不思議な建築であらうか。これは外部だけの問題ではない。內部に於てもさうなのである。

では正面に廻つて堂內に入らう。ここで入母屋の太瓶束・虹梁式の妻を見て置くがよい。禮堂の正面右手の緣には、それから東側に曲つて東寄りの一間まで鍵の手を成して廂下に閼伽棚を設けられてゐる。この閼伽棚は現存する閼伽棚中で最古に屬する一つである。形もよく、細部もよい。

堂內は合の間の中央で格子戶を以て二室に仕切られ、禮堂側は板床、本堂側は土床である。先づ禮堂の天井を見よう。天井は化粧屋根裏となつてゐるが、その化粧小屋組は天竺樣の細部を自由に驅使した美しい構成である。吾々は天竺樣が日本の古建築に智惠づけた美しい組成の一つに驚かなければならぬ。中の間の天井は小組天井になつてゐる。次に本堂に入らう。

禮堂に設けられた納經所で案內を乞ふと、堂の東側の緣を通つて本堂內に導かれる。堂內は四半敷の瓦床（もとは漆喰叩土間）で、堂の平面は四周一間通りを外陣とし、中央の三間二間を內陣として、外陣天井は化粧屋根裏、內陣の小天井附の折上の組入天井には三個の天蓋が釣られ、內陣一杯に木製の須彌壇がしつらへられてゐる。

ある古美術の愛好家がこの堂を評して「寶石を入れた美しい筥だ」と嘆じたことがあるが、まことにこの須彌壇上にひしめき合ふ天平佛の氾濫には、一瞬呆然とさせられるものがある。

壇上の諸佛を拜するには正面に至つて本尊を拜し、それから西側の扉口の下に立つのが有利である。ここが最も光線の狀況がよい。

さて須彌壇上の中央には八角二重の佛壇が置かれ、その上に本尊不空羂索觀世音が安置されてゐる。同じ壇上、本尊の少し前方には日光・月光の二菩薩像があり、更にその左右の壇下には巨大な梵天・帝釋の二天像が並び立ち、その前に不動明王と地藏菩薩とが置かれてゐる。

須彌壇の四隅には四天王を、日光・月光の前には金剛・密迹の二力士像を並べ、本尊のうしろの左右の壁際には黑い厨子が二つ置かれてあるが、これにはそれぞれ破損した吉祥天像と辨財天像とが納り、本尊直後の小さい厨子には今は奈良帝室博物館に出陳されてゐる彌勒像が入つてゐた。そ

三月堂本尊不空羂索觀世音菩薩

してその後には以上の諸尊に背をむけた大きな厨子にはかの有名な執金剛(しっこんがう)神像を秘めてゐるのだ。ああ、何と云ふ豪華な光景であらうか。實に佛體十五軀、厨子四個、これらは彌勒・地藏・不動の三體を除けば、すべて天平彫刻の精華である。

しかしこれらの多くの佛像は三月堂創立の當初からかくの如くにして存したわけではない。それらの日には本尊不空羂索觀音と、梵天・帝釋天、四天王の乾漆像九體だけで、日光・月光を初め、吉祥天、辨才天、執金剛神の塑像五體と彌勒、地藏、不動の三木彫は後日他から移されたものではないかと考へられてゐる。

不空羂索觀音像

乾漆金箔、高さ約一丈一尺九寸ある。この像の製作は堂と略、同時と考へていいやうである。像は三目八臂、八葉六段の蓮座を踏んで、右上手は錫杖を持ち、左上手は蓮花を捻じ、次手は合掌し、右三手は白拂を持し、左三手は羂索を執る。持物は左上手の蓮花の他は何れも後世の補加のやうである。合掌してゐる手には大粒の水晶が秘められてゐるが、この像の全身にまつはる表現に一種の怪奇性のあることを見逃してはならぬ。これはこの像が密敎の尊像であるからである。不空羂

索觀音と云ふのは密敎六觀音の一で、菩薩天慈の羂索を以て群生を利濟し、空にかかげるを以てかく名づけられたものであるが、その羂索は左三手に持してゐるそれである。堂々と安定した力强い構成、十分に奥行のある佛身の肉付き、細部に行きとどいてゐる寫實のたしかさ、正に當代彫刻を代表して遺憾ない。しかし上半身殊に肩の邊りが大きい割に下半身が貧しい感じはよく指摘せられるところであるが、この瑕瑾を責めることはこの像にとつていささか望蜀の感に過ぎる。

殊にこの像を見事にしてゐるのは臺座、寶冠、光背等の莊嚴である。臺座は敷茄子のある八葉型の框座を持つた所謂大佛樣蓮座で、蓮瓣に浮彫された一種の唐草文はひとしほ秀拔である。寶冠はいま他に藏されてゐて、ここで見ることを得ないが、銀製透彫の寶相花風の三面頭飾に無數の水晶・瑠璃・眞珠・管玉・勾玉等を裝ひ（その數二萬又三萬と云はれる）正面には八寸程の阿彌陀の化佛を置いてゐた。

本尊の光背は又何といふ華麗なものであらうか。かゝる異制の光背は他で見ることが出來ない。全體は細い線條からなる重圈式楕圓で、各圈の上部は尖端を持つてゐる。中央は同じく楕圓形の板になつてゐて、その周圍を四重の輪がかこみ、その板からは十二本の幹線と三十六本の細線とが放

射狀に放出され、輪線と交叉して傘を擴げたやうになつてゐる。そしてその交叉部には隨所に唐草文様の透彫を配し、周邊には火焔の透彫を配してゐる。頭光は別に高く半肉に彫り出された蓮花紋を中心とする二重の圓からなり立つてゐる。線條や火焔・唐草は木彫であるが、頭光中の唐草や透彫は乾漆だと云はれる。驚くべき工藝の巧みさではないか。

現在佛體と光背との釣合はあまりよくない。これは光背の位置が低すぎるからであるが、鎌倉時代に至つて床張の禮堂が構へられたため、それに應じて今の須彌壇が出來て佛體の位置が高くなり、かかる不都合が生じたものと說かれてゐる。以前はもつと低い石築の須彌壇でもあつたらう。

因みに、いまの須彌壇は四周の框に劍巴文の銻金具を裝打してゐるが、これには鎌倉式の特徵を備へた見事なものが混つてゐる。

なほ本尊をのせてゐる八角二重の佛壇が又見事なものである。上下壇とも勾欄を廻し、勾欄には美しい卍字形の組子を入れ、斗束は撥形をしてゐる。上壇は側面に美しい格狹間を入れ、下壇は横連子を入れてゐる。

勾欄の架木はいまのものは新しく代つてゐるが、斗束の上端に切り缺きがあるから、古くは各隅で交叉してゐたものらしい。

なほ上壇の敷板（板厚二寸餘）の八方の隅に徑二寸七分餘の圓穴が穿たれてゐる（下壇にはこれを見ない）。この穴は嘗てそこに柱の如きものが立ち、上に蓋の如きものを支へてゐたことを示すものであるが、それは現存の本尊を收容するには餘りに高きに失して恰好を失ふやうである。從つてこの二重の壇は元來この絹索像のために造られたものではなかつたらしい。阿彌陀悔過料資財帳に、天平十三年三月に造り了つた阿彌陀淨土變一鋪として

宮殿一基　漆八角高一丈六尺三寸、

蓋　頂居金花形一球、八角居金鳳形八口、各咋雜玉幡、裏着大蓮花形一枚、並以金銀墨畫飛菩薩鳥雲花形等

柱八板　並以金銀墨畫鳥花等形

基二階　上階池磯敷瑠璃地邊着金銅鏤臂金并畫飛菩薩等形　下階在連子着金銅鏤臂端裏等高欄上居金花八球

の記載があるが（この中には阿彌陀三尊と音聲菩薩十軀、羅漢二軀が安置されてあつた。この阿彌陀堂は要錄に南阿彌陀堂とあるものらしく、永觀二年以後、要錄撰述以前に大風で顚倒したらしい。その雜物は既に延喜廿年絹索院の雙舍に移納されてゐる）、現存の八角壇はその大さの點や、上

壇に連子があり、勾欄があるのが資財帳の記述と一致してゐるやうであるから、この宮殿の「基二階」に相當するものと思はれる。然りとすればこの佛壇は延喜の頃又は阿彌陀堂が風に倒れてから法華堂に移されて本尊の佛壇に轉用されたこととなり、その製作は天平十三年頃のものとならう。

梵天、帝釋天

梵天は一丈三尺四寸二分、帝釋天は一丈三尺四寸五分といふ巨像であつて、本尊の兩脇侍としては誠にふさはしい。東方を寺では梵天と呼んでゐるが、衲衣の下に甲を著けてゐるから或はこれが帝釋天であるかもしれない。兩腕を稍々高く擡げ、左手に卷子を執つてゐる。

西方のものは寬衣を纏ひ、右手に持物を執つてゐたやうな手付をしてゐる。兩像の巨大なことは現存梵釋像中の第一である。その鼻盤等は稍々小造りで、頭髪、毛筋の細やかにして、衣文を疊むこと少なく、且つその衣文は隆くない。そして着衣に變化がなく、赤黑い塗色など印象の稍々薄いところのある點に憾みが存する。その爲めに一種茫漠として健康な感觸を湛へてゐる。仔細に見ればその部分的な造形には極めて巧みな技巧を示してゐる。兩像共に八角形二重の框座の上に立つてゐるが、その側邊には彩色の美しい文樣が殘されてゐる。しかし像と同じく剝落の甚しいのは惜しい。

日光、月光菩薩像

三月堂と云へば、美術史に關心をもつ程の人は誰でもこの像のことを想起するに相違ない。本像は天平彫刻中の最高峰に立つものである。神品とはかかるものを稱する言葉であらう。

本像は八角須彌壇の上、本尊の左右に侍立してゐるので、いまは本尊の脇侍の如く見える。しかし本尊の脇侍は壇外左右に立つてゐる梵天・帝釋天がそれである。これは材料も本尊とは異る塑像で、作風にも多少差異があり、前述の如く後世の移安像である。又兩像は普通日光・月光と唱へられてゐるが、在俗の天部型である事から嚴密には梵天、帝釋天だと云はれる。

ではいつ頃にこの像はこの堂に移し安んぜられたのであらうか。又それは何處から持ち來されたのであらうか。この問題については遺憾ながら今のところ明答は得られないが、元祿の編著と思はれる東大寺私記にはこの像がこの堂内で擧げられてゐるから、元祿以前に移り來つたことだけは確かである。

像の高さは日光菩薩六尺六寸五分、日光菩薩六尺八寸一分で、共に四寸ばかりの八角二重の臺上に合掌して立ち、絳衣を着し、日光の方は更にその上に袈裟をつけてゐる。今は地をあらはし、灰色の冷い色調に全身を蔽はれてゐるが、仔細に觀察するとほのかに彩色が殘つてゐる。それによ

ると、最初は瞳は墨をもつて描き、肉身は具の多い朱、唇は朱、鬚は群青、上衣の表は岱赭、裏と下衣は綠青、と袖口の表は朱、裏は綠青をもつて色どり、上衣の腹部のあたりには五色文が描かれ、袖口には菱綠、下着の裙廻りには忍冬文を截箔で置かれ、衣の口には總じて箔をつけてゐたらしい。殊に月光の袖口には美しい綠が殘つてゐる。

金剛、密迹力士

怒髮天を衝き、金剛杵を振り上げ、口を開く方が金剛で、右手に小劍を執つて口を結んでゐる方が密迹である。共に脫乾漆の高さ一丈一尺五寸の大像である。力士像は普通裸形であるが、本像が甲をつけてゐるのは珍しい。甲をつけた像には他に西大門の古額についてゐる二王像があり、繪畵では法隆寺王蟲厨子の扉繪にも見えてゐる。なほこの像の造形に於て注意すべきは、憤怒を表した面相に鬚髯が彫りあらはされてゐることである。かかる例は他に當麻寺金堂の四天王像に見るばかりである。彩色は極めて良好に遺存し、被甲を蔽つてゐる美しい彩色文様は天平模様の華麗さを吾々に敎へてくれる。それは實に五彩の美を極めたもので、綠青、群青、岱赭、朱、胡粉等をもつて寶相華文蔓草文、蓮華文を描き、又金箔が押してある。吽型の背には大きな蓮華文が描かれ、呵型の背部には寶相華文が殆んど完全に殘つてゐる。甲の各部の緣には忍冬文、四菱文等の浮彫模様が施されてゐる。頭と頭髮と手とには岱赭が塗られてゐる。

四天王像

奈良時代前期までの四天王像は直立した靜態であつたが、この像になるといささか運動性を表してくる。後世の四天王像が動態であらはされてゐることに對して、これらはその先驅をつとめる。製作は前記二王像に酷似したもので、像高いづれも一丈餘の巨像である。全身に殘された彩色文様は二王像と共に美しい限りである。

持國天は被甲して右手戟をとり、左手を腰にあて、邪鬼をふんでゐるが、法隆寺金堂、當麻寺金堂像、戒壇院像、唐招提寺金堂像に見る如く、右手に刀を執つてゐるのが普通である。甲は非常に精巧なもので、力士像よりは手がこんでゐる。模様は背中の方によく殘つてゐて、肩胛骨の下あたりに美しい鳳凰を對にして描いてゐる。兩肩と腹には美しい龍の首がついてゐる。

增長天は冑をかぶり、邪鬼は二軀である。腹のところの獸は少し下つて帶のところについてゐる。廣目天は右手に筆をとり、左手に卷子を握る。全身の彩色文様は畧々完全に殘つてゐる。これも邪鬼は二軀である。

多聞天一に毘沙門天と云はれるが、左手に戟を杖つき、右手に寶塔を捧げる。邪鬼は一軀である

が、その首は後補である。

從來の四像については全身に力感の乏しいことを憾みとされてゐるが、これは像の構造に基いてゐるやうに思はれる。即ち本像の構造は未だ所謂脱活の法を知らなかつたと見え、平板と細い柱材とを用ひて簡單な骨組を構へ、それで漆の外皮を支へてゐるのである。これでは自由な肢體の表現はむつかしい。

造顯は梵天・帝釋、二王像と共に本尊と同時であらうと考へられてゐる。

吉祥天、辨才天

吉祥天は六尺六寸六分、辨才天は七尺二寸二分の塑像である。共に破損甚だしく、塑土が剝落して隨所に像心の木材や手指の骨となつてゐる鐵條を露はし、彩色も大部分剝落してゐる。今は鐵鎖を以てその胴體を支へて倒壞を防いでゐるが、この見るも傷はしい姿の内にも天平の豐麗な容姿は十分に認められ、原像の秀拔さが一見して推察される。そのふくよかな顏貌は唐の女俑にも比較すべく、正倉院御物の樹下美人、藥師寺の吉祥畫像を聯想せしめるものがある。

吉祥天の寶髮は全部落ちてしまつてゐるが、恐らく藥師寺吉祥天畫像の如くであつたであらう。辨財天はいま五臂しか殘つてゐないが、多分もとは八臂で所謂金光明辨財天であつたと思はれ、金光明經には婆羅門が辨財天を讃する呪に

常以八臂自莊嚴。各持弓箭稍斧長杵鐵輪並羂索。

とあるから、この手にはそれぞれ以上の持物があつたのであらう。

共に目の線が極めて細いが、これが一つの魅力をなしてゐる。口は小さく可愛い。

兩像が三月堂本來の佛像でなく、移安像であることは前に述べたが、近來の研究によると、これは吉祥悔過會を修した吉祥堂の本尊で、その製作年代も寶龜三年を標準年代と考へるべきであるとされてゐる。

即ち要錄諸院章の吉祥堂の條に

吉祥御願於此院修之。天暦八年吉祥院燒失。由之移羂索院法華堂行之。

とあり、又吉祥悔過會は天平神護三年正月始められた佛會で、その後は毎年諸國國分寺でこれを修する例となつたが、東大寺で初めてこの悔過會が行はれたのは寶龜三年であつたから、この兩像はその頃その本尊として作られ、吉祥堂の燒失後に現在の堂に移されたものと考へられる。

地藏菩薩像

高さ二尺八寸四分、寄木造の彩色像で、右手に錫杖を持し、左手に寶珠をとり、岩上に結跏趺坐

する。瞳には玉眼を嵌め、胸には瓔珞をかける。彩色は新しいが、それも今は殆んど剝脱してゐる。光背は圓光の二重光背で、周圍に火焔を廻らし、上輪の中央は八乘の蓮華になり、更にその中央から放射狀に細長い光線が放射される造像の詳細は不明であるが、その手法よりして鎌倉盛期を下らざるものとすることが出來よう。法花堂要錄寛正六年の條に

悔過ト地藏菩薩トノ間ニ大般若櫃六合ヲ置也。

とあるから、寛正には既にこの堂に安置されてゐたことが知られる。貞享四年に上木された奈良曝を見ると、この地藏菩薩を戀の地藏と呼んでゐるが、面貌の秀麗さはこの綽名にふさはしい。

不動明王像

中尊不動明王は高さ二尺八寸四分、右の制多加は二尺九寸四分、左の衿加羅は二尺五寸七分の玉眼寄木造彩色像であるが、彩色の剝落は甚しい。前記地藏像と共にあまりに他の諸像が秀拔であるために見落されやすいが、これは我が國不動像中でも二三を競ふ優作である。殊にこの像の中で制多加童子に造像銘があるので名高い。即ち

（左足柄前面）

應安六癸丑九月十九日事始
同年十月十九日綵色立

（同內側）

願主　當御堂之
聖正法師
生年六十一

（右足柄前面）

奉加衆交名帳御身奉籠之

（同內側）

大佛師　淸玄法橋
堂□和□□

體裁上からいつても、製作上からいつても、この三躰は同趣であるから、この造像銘は三躰全部に通ずるものとして差支へなからう。

像は三躰とも動的な表現であるが、極めて寫實的で、一具としての統一を失つてゐないところに非凡な意圖が窺はれる。

彌勒菩薩

元來本尊の背後の小厨子の中に納められてゐたのであるが、今は奈良帝室博物館に出陳されてゐる。像高一尺三寸といふ小さい坐像でありながら、强健な氣宇を感じさせる。

全軀一木彫成で、所謂翻波式刀法の衣文などから見て、平安初期の作と考へられてゐる。しかしどことなく奈良朝式の雄偉な氣風を存し、大佛を聯想されるところから一に『試みの大佛』と呼ばれ、又良辨僧正の念持佛であつたといふ傳說もある。

なほ西大寺の興正菩薩、唐招提寺の大悲菩薩嘉禎二年法華堂の慈氏尊の前で自誓受戒して律宗の振興に盡したと傳へられるが、その時の本尊は恐らくこの彌勒であつたと考へられる。

執金剛神

本尊の後の墨塗春日厨子の中に秘められ、古來秘佛として傳來されたが、近年に至つて毎年八月二日に開扉せられることとなつたので、美術史家の鑑賞を充たすこと限りない。像高五尺五寸二分、全身被甲して左足を踏み出し、腰をひき、左手は固くこぶしをつくり、右手に金剛杵をふりかざして、大喝まさに打たんとする憤怒の形相を示してゐる。その顏は雄偉によく整ひ、滿身の力感は見る者をして讃嘆させずには措かない。かつと開いた口中の朱や、黑耀石を嵌入した瞳の輝きは甚だ印象的である。憤怒像としてかほどまでに凄じさの表現されたものはない。秘佛として傳來したので像形彩色は非常によく傳へられてゐるが、寶髻の銜りの右方と左手の手指と天衣の一部に缺失がある。彩色は朱、綠青、群青、紺青、岱赭等を主とし、文樣は寶相華や唐草を暈繝法をもつて描き、胸當、肩當、脛當等の綠の唐草文は金泥地に岱赭で勾勒體に描いてゐる。この彩色の美しいのも本像の著名な理由の一つである。持物の金剛杵は木彫であるが、天衣は兩端に太い針金を入れて塑土を保持させてゐる。

この像については、古來幾多の傳說がまつはつてゐる。東大寺要錄以下の諸書の傳へるところによると

聖武天皇の御宇のはじめ、この地に金鐘行者といふ者があつて、執金剛の像を祀つてゐた。金鐘行者はこの神像の足に繩を縛りつけて祈つてゐた。あるときは像はかがとから光を放つて、それが宮中にまで達したので、天皇は大いに怪しんで使を遣はしてその光の原を搜させられた。使は行者のところへ來てこの有樣を見て歸り伏奏した。天皇は行者を召して何を求めて

ゐるのかと尋ねさせられると、行者は出家し度いと云ふ。天皇はこれを許させられた。後天平五年に至り天皇は行者のために寺を建てさせられ、之を金鐘寺と名けた。金鐘行者とは良辨得度以前の名であり、この寺が即ち法華堂である。

と云ふのである。從つて本像は良辨僧正の念持佛であるといはれてゐるが、法華堂は即ち金鐘寺ではなく、金鐘寺の存在は天平五年を遙かに遡るものであるから、この話柄が多く正しさを主張し得ないことは云ふまでもなからう。しかし本像は早く平安初期には、既に今の如く、この堂の北戸に立つてゐたやうであるから、以上の話柄は本像が三月堂の草創と共にこの堂に移入されたことを示すのであるかも知れず、不空羂索神變眞言經第八淸淨無垢蓮花王品には執金剛神は羂索觀音に侍することを說いてゐるし、法華經普門品には執金剛神が觀世音三十三應身の隨一たることを擧げてゐるから、三月堂の創立に對して靈驗の聞えたこの像を移し安んじたと云ふことも理解し得ないものがないわけではない。

又天慶年間に平將門の謀反した際、本像にその追討を祈願したところ、神像の寶髻の元結の右端が切れて大蜂と化し去り、やがて將門を斃殺したといひ、その冥助あつて惡賊調伏の事が成つたといふ。その時、本像はその姿を隱すこと廿餘日に及び、再び現はるるや滿身濕りを帶びて流汗せ

執金剛神

る如く、天冠の右方の銻は缺落して奮戰のあとを示してゐたともいはれる。まことに本像の威武を物語るに適はしい傳説である。その故にこの像は古く蜂の宮と云はれ、いま本像の前に吊す鐵燈籠には蜂の彫刻が施されてゐる。厨子の兩袖には、また金鵞行者の緣由と將門調伏の靈驗とを描いてゐる。

因みに、本像は當初から秘佛とされてゐたものではなかつたらしく、秘佛となつたのは尊信の向上した鎌倉期に入つてからであるらしく、いまの厨子の造進がその契機ではなかつたかと考へられてゐる。厨子は春日型で須彌壇とともに鎌倉時代の作である。年代の古い大きい厨子として注意すべきものである。

寛正六年足利義政が本寺に參詣した際、特に將軍のために厨子は開帳されたが、その節寺家では「勅封は附せざるも御代に一度の外開帳致さず」と申出たと傳へてゐる。法花堂要錄

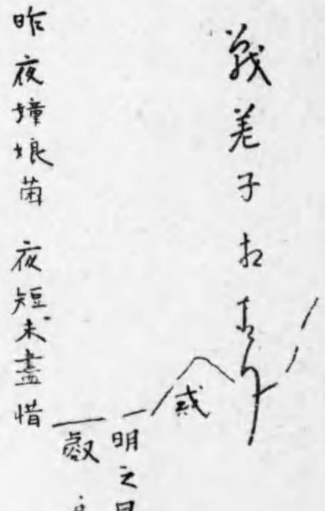
なほ我國では金剛二力士として阿吽一對のものが多い中に、本像は獨尊の金剛力士であることも珍稀であるし、又裸形でなく被甲してゐることも亦當堂壇上安置の金剛力士と共に珍しく注意すべきものである。

天　蓋

天井を飾つてゐる天蓋はまた珍しく美しいものである。天井は大虹梁によつて三間に分たれ、それに一つづつ莊嚴されてゐるのであるが、これは本尊の頭上と梵天・帝釋の頭上に置かれたことになるわけである。しかし三個は同一製作ではなく、兩端の二個は形の整美に於て中央のものより比較にならぬほど優れてゐる。即ち兩端のものが天平當初のものと考へられるに對して、中央のそれは鎌倉の模作であらうとされる所以であるが、當初の中央の天蓋は、本尊の秀拔さから見て、果していまの如く兩端のものと、規模も形式も同一であつたか否かは疑問である。恐らくその脇侍に對して本尊の尊嚴さが示される如く、兩端の天蓋より優れて美しいものであつたのではなからうか。

天蓋は中央に大蓮華を置き、周圍に八個の小蓮華を配し、それぞれ花心に鏡を嵌めてゐる。蓮華には葉を配して寶相華の如くにし、中央の大蓮華花心の鏡からは四方に放射光を出してゐる。放射光は五十八本の鐵條から成り、蓮華と葉とには綠青や朱で彩色が施されてゐる。東大寺要錄によれば、天井には三十六面の鏡があつたと云ふが、いまは二十七面を存するに過ぎない。この鏡から考へても、中央の天蓋は少くとも十八面の鏡をつけた大規模のものであつたことにならう。現在寶藏に三月堂天蓋所要と傳ふる古鏡二面を存する。一は唐式の怪獸葡萄鏡、他は方圈十二支鏡で、明治卅三年修理の節とりはづしたものといふ。

なほこの際に鏡の裏面から次の落書稻垣晋清師の記憶によれば東の間のある一面といふが發見せられてゐる。



さて以上を以て三月堂の佛像の說明を了るが、この堂を出るに當つて見落してならないものがある。それはこの堂の扉方立に鋭利な小刀様のもので彫り刻まれてゐる落書である。即ち

• 西側扉北方立　始自長承元年十一月廿八日千日不斷花也

●西側扉南方立　保延元年八月廿五日千日滿但結願九月十二日畢
●東側扉南方立　久安五年四月十四日自千日花奉始畢也
●東側扉南方立　仁平元年十二月卅日
●東側扉方立　平治元年七月十三日千日花奉始

こゝに「千日花」といふのは、花供又は當行とも稱せられた行法の事である。いま三月堂の北面に石を以て八角形に圍まれた場所があるが、これはこの千日不斷花を燒き捨てたところであると云ふ。

なほこの堂に關して見落してならないものに禮堂前の石燈籠がある。全高八尺二寸、六角形、笠の蕨手が缺けてゐるだけで寶珠、火袋、竿、反花、基礎等完存し、竿に次の刻銘がある。

敬白
奉施入　石燈爐一基
右志者爲果宿願所
奉施入之狀如件
建長六年甲寅十月十二日
伊權守行末

施主の伊行末については前に述べるところがあつたが（前篇第六章）、これはこの眞摯な工人のいま殘された唯一の作品として貴重なものである。ここに「爲果宿願所」とある宿願とは何を意味するのであらうか。或は東大寺再興に於ける工事の悉なき竣成を云ふのかも知れない。

三月堂雜舍

前述の如く要錄永觀二年の分付帳によれば、三月堂には七間檜皮葺會房一宇、廿一間二面檜皮葺僧房一宇、一間檜皮葺僧房一宇、双倉一宇が附屬してゐたとあるが、いま存するものは、三月堂東側の手水屋と北門、校倉一宇とだけである。

手水屋

本堂の東に廊によつてつながれ、西面してゐる建物である。桁行七間、梁間四間、その東南側の一部を缺き、切妻造、本瓦葺、軒は一重の疎（まばらたるぎ）椄で、圓柱舟肘木組である。正面南四間は一間通り

を吹き放とし、内側に板唐戸を並び設け、その扉のそれぞれに「東大寺法花堂妻戸也」と刻まれてゐる。その北三間は連子窓、引違戸、鬼格子、北面は東より中央間に板唐戸、他三間は塗壁、背面は南三間を硝子窓（明治年間の改造元は塗壁）とし、この部が半ばかけてゐる。その北は板唐戸と引違戸、殘り二間は連子窓となる。南側の中央二間は板唐戸、外部は濡縁で、廂葺きおろし、東側は塗壁である。内部は、床を疊敷とし、天井は化粧屋根裏、梁行中央二間に大虹梁を架し、これに束をたて、舟肘木を置いて棟木をわたしてゐる。この虹梁は極めて天竺様的なものであり、木鼻には天竺様の繰形を附してゐる。

西北隅には別に區劃があつて、そこに大黒天を祀つてゐる。建立には文献の據るべきものはないが恐らく鎌倉中期は下るまい。しかしその後に多大の改造を經てゐるらしい。いまは東大寺圖書館に保存されてゐる當堂扉の一つに

東大寺　大永六暦

法花堂　脇　戸

手水屋

と刻まれたものがあり、大永に修理のあつたことを示してゐる。

この建物は、現在では、法華堂法要の際に僧侶の休憩所となるのであるが、以前は花供養の參籠所であり、堂衆方の集會所でもあつたらしい。永觀の分付帳に見える七間の會房とはこれに當るものであらうか。

大　黒　天

高さ約三尺の木彫彩色像である。大黒天は古くから寺院に於て厨房の守護神として祀られてゐたものであるが、今見るやうに、槌を握り袋を背負つて米俵の上に立つ形相は後世のことである。古くはこれ以外に種々の姿があつた。遺品も相當にあるが、この像は布衣を纏ひ、頭巾を被り、背に袋を負ひ、右手を腰にあつて拳をなしてゐる。この拳印は大黒天の古い形式のものに多く見るところである。觀世音寺の像は藤原頃と見られてゐるが、彼の像が唐服を纏つてゐるに比べて、これはよほど日本化した姿をしてゐる。恐らく鎌倉頃のものであらう。但し製作は大して優秀だとも思はれない。

顔はかすかに微笑してゐる。古像は多くいかめしい容貌をしてゐるのに、この像がそれによつてゐないのはこの時代あたりから大黒天崇拜の内容が變化して來たのではあるまいか。衣には寶珠が描かれてゐる。

經　庫

桁行二十尺三寸、梁間十七尺二寸の校倉で、屋根は四注造、本瓦葺である。軒は一重極、内部化粧屋根裏を露はしてゐる。南を正面とし、そこに板扉を構へる。建築時代は詳かでないが、その構造手法から推せば先づ奈良朝に歸すべきものであらう。しかしこの倉は元來法華堂附屬のものではなく、手向山八幡宮の安居屋(あにのや)の倉で、正德頃に上司倉の校倉が移建せられたものではないかと云はれる。（筒井英俊氏「正倉院に關する二、三の問題」寧樂十五）八幡宮の安居屋は塔中觀音院の位置にあつたもので、これによつて建物がいま三月堂に背を向けてゐる理由が說明されよう。

北　門

鎌倉中期頃の造立と考へられる四脚門であるが、よく纏つた好もしい門である。兩妻や頭貫の上には鎌倉式の美しい板幕股があり、注意される。

二月堂

二月堂はお水取りの行法によつて著名な堂である。お水取りとは正しく云へば十一面悔過(くわか)の行法のこと、古く毎年二月朔日より二七ケ日の間勤修せられたので修二會(しゅにえ)とも呼ばれた。二月堂とはこれに因んだ稱呼である。

修二會の始源は、二月堂繪緣起によれば、東大寺第二所別當實忠にありとせられ、次の如く物語られてゐる。

天平勝寶三年辛卯十月。實忠和尙。笠置寺の龍穴より入り。北へ一里ばかりを過けるに。都率の內院成けり。四十九院、摩尼寶殿を巡禮す。其內諸天殊集て。十一面の悔過を勤修する所あり。常念觀音院と云ふ。聖衆の行法を拜して。此行を人中に模して。行べき由を伺。聖衆告曰く、此所の一晝夜は。人間の四百歲にあたる。然ば行法の軌則。巍々として。千返の行道懈らす。人中の短促の所にて更修かたし。又生身の觀音をなしまするは。爭か人間輒く模へきと云。和尙重て申く。勤行の作法をば急にし。千返の行道をは。走て數を滿へし。誠を致て勸請せは。生身何ぞ成給はさらんとて。是を傳へて歸りぬ。

實忠和尙。攝津國難波津に行て。補陀落山にゐかひて。香花をそなへて。海にうかへ。懇誠をぬきいてて、所精勸請す。かの閼伽の器。はるかに南をさして行て、又かへり來る。かくする事百日はかりを經て。後つゐに。生身の十一面觀音。まのあたり補陀落山より。閼伽の器にの

りて來給へり。和尙是を當寺の羂索院に安置し奉る。今は二月堂といふ……。

天平聖寶四年壬寅二月一日より初めて。大同四年にいたるまで、六十ケ年かあひた。和尙彼生身の觀音の御前にて。毎年二七ケ日夜。六時の行法を修す。

從つてこの行法の創始は天平勝寶四年とされたのであるが、かかる靈異にみちた物語には如何程の信賴を置き得るかは問ふまでもあるまい。殊にこの寺傳創草については、かの勝寶の四至圖に三月堂の北には井を記すのみで、この堂は所見されないから、十一面悔過は所傳の如く勝寶に始められたものかも知れないが、この堂の創立は更に後れたものであらう。三月堂の項に引いた永觀の分付帳によれば、二月堂は古くは三月堂に屬してゐたやうである。修二會は上述の如く舊曆の二月一日から修せられたものであるが、今は太陽曆にかへつて三月一日から十四日まで二週日に亙つて行はれてゐる。行法は繪緣起に云はれる如く極めて烈しいもので、この間を六日六時の行法とて、日中、日沒、初夜、夜半、後夜、晨朝の六回の法要が行はれるが、參籠の僧は前年十二月十六日に決定され、二月二十日から別火に入り、精進潔齋して準備するのである。別火はいま戒壇院に於て行はれてゐる。

お水取りとは、この行法中十二日目の眞夜中、良辨杉の西側の閼伽井から、お香水を汲上げる儀式があるが、それに因んで名けられた稱呼である。又この夜七時頃練行衆は童子に籠松明(かたいまつ)をかつがせ、差懸(さしかけ)(沓)の音高々と登廊から上堂する。即ちこれが俗に「お松明」と稱せられるものであるが、その松明といふのは長さ一丈餘の青竹の先に片木(へぎ)や杉の葉を藤蔓で結びつけたもので、威勢よく燃えたのを重さうにかついで登廊を登り、二月堂の廻緣に出て大車輪の如くふりまはすと、火の子が花火のやうに落ち來て壯觀この上もない。

この外、行法は日を異にしていろいろ修せられる。五日には實忠忌、(實忠は二月五日後夜の行法中姿を隱したといふ)五日と十二日とには過去帳讀上げ、五日・六日・七日・十二日・十三日・十四日には走りの行法、七日には小觀音、十二日・十三日・十四日には達陀(だったん)の行法があり、十五日は涅槃會が修せられる。中でも達陀の行法は頗る珍しいものである。これは實忠が行法を修した際に兜率の八天が降臨して種々の神變をあらはしたことを模したものと云はれ、怪奇な扮裝をして狹い內陣の中で松明をふりまはす。火焰は天井を拂ふやうに四散し、夢幻的な雰圍氣を醸し出す。修二會は今の奈良をいろどる古典行事の尤なるものの一つとなつてゐる。

堂は治承の大佛殿炎上の際には、直下の閼伽井屋まで延燒して來たが、幸に類燒を免れ、又正嘉二年二月九日內陣に火を失したときも僅かに佛壇を燒いたのみで大事なきを得、更に永祿の本寺炎

上にも火を蒙らず、舊觀を保持して來たが、寛文七年二月十四日、內陣に火を發して遂に全堂を烏有に歸せしめた。現宇はその翌々年再建されたものである。從つて三月堂の如き建築の美しさはないが、暗い樹立を背にして山腹に倚り、西方の半ばを懸出した舞臺造の堂の景觀にはまた好もしいものがある。殊にこの舞臺からの大佛殿へかけての展望は奈良の最も美しい眺めの一つを成してゐる。

即ち正面目路の及ぶところ、生駒の山脈が大空を限り、左には遠く信貴・葛城の山々が見え、その前面に展開する水田や平地は、古への平城京の地域である。天氣が晴朗であれば藥師寺の塔影も見えるであらう。そしてかかる遠景を背景として、三月堂前の附近の樹海の上に大佛殿の悠然たる上層が浮んでゐるのだ。舞臺のすぐ下から亭々と生ひ立つ老杉は俗に云ふ「良辨杉」である。鷲にさらはれてこの杉に逞ばれ來つた幼兒が後の良辨僧正だといふ傳說は誰でも一度は聞いた記憶のあるなつかしい昔噺であらう。良辨杉の下のあたりに散在する堂舍は二月堂關係の雜舍である。

本尊光背

本尊十一面觀音は寺傳によれば佛身僅かに七寸、實忠が難波の海から取り上げ奉つた生身の觀音像といはれてゐるが、本尊にはなほこの小觀音の外に大觀音があるといふ。兩軀とも絕對の秘佛で、參籠の僧でさへ開扉することを許されず、尊體の形相は知られない。

しかし寛文七年本堂炎上の際に大觀音は無事なるを得たが、その光背は破碎したと云ひ、その際拾ひあつめた破片六十七片を傳へてゐる。破片は復原せられて奈良帝室博物館に出陳せられてゐるが、それによると舟形堅七尺六寸五分、横四尺四寸五分、表裏共に全面に夥しい佛菩薩等の像を線刻にし、又鍍金されてゐたらしい。いま背面は窺ふを得ないが、表面には千手千眼觀音を中心として如來像、雲中供養の音聲菩薩、天部形像、須彌山、鬼形等を彫り出し、千手觀音曼荼羅とも稱すべき圖樣である、その練達せる鐫鏤の手法は大佛蓮瓣の線刻圖を想起せしむるものがあり、奈良朝の光背としては勿論、繪畫的遺品としても貴いものである。

なほ注意すべきは圖樣の中に地獄圖をあらはしてゐることである。恐らく我が國遺品中の地獄圖として最古のものであらう。

二月堂雜舍

さて二月堂の西邊には二三の修二會用途の堂舍が立つてゐる。二月堂北脇の廊を下つたところに、これと丁字形に接續されてゐるのは練行衆の參籠所と食堂(じきどう)とである。建物は廊との接續部を通路として二分され、北五間を參籠所、南四間を食堂とする。これと道を距てて相對するのは湯屋であり、これに雁行する南側の一宇は佛餉屋(ぶっしゃうや)(御供所)である。

食堂、參籠所は共にその創建は明かでないが、治承の兵火にはこの食堂は免れ得たといふから、それ以前に建つてゐたらしい。現在の建物は二月堂古記錄中に

大床宿所食堂湯屋は新禪院の本願中道聖守上人建立也

と見える。聖守上人は承久から正應の人であるから、少くとも正應以前の再建であるらしい。しかし今は後補の箇所が多く、外觀に室町期の樣相も見えてゐる。外廻り總圓柱、舟肘木である。北方の參籠所は南及び西側に高窓、連子窓、板戸を設け、內部を數室に仕切り床を張つてゐる。

食堂はその東側すべて壁、西及び南側は板扉、連子窓を設け、內部は瓦敷である。

食堂の北寄りには比丘形の聖僧像が安置されてゐる。右手に物をとる形をなし、左手には寶珠を載せてゐる。像高は三尺二寸五分、塑造であるが、塑土の破損甚だしく顏貌を損じてゐる。まづ奈良時代の製作と見てよからう。寺では頻頭顫尊者と稱へてゐるが、食堂に安置せることと容儀とより察すると、文殊菩薩なるべく、奈良時代のものとすれば現存聖僧中の最古の遺品である。

また食堂安置の訶梨帝母像も注目すべきである。伽藍や僧尼の住房の守護神として食厨に置くのは支那古來の風習である。本像が食堂に安置されてゐるのもそれに依つてゐる。豐麗な姿は淨瑠璃寺の吉祥天女像を偲ばせるやうな女性の美しさを表し、像高一尺五寸五分、藤原末期の造像であらう。彩色剝落し、右手先と、もと〳〵踏下げてゐたであらう左足は膝から先を缺失してゐる。

佛餉屋は總圓柱、大斗肘木組で頭貫・木鼻には天竺樣の繰形があり、軒は一重で棰鼻には鼻隱板を打ち、妻は扠首組、木割の大きく極めて天竺樣の濃厚な建物である。造立は鎌倉時代と判ぜられる。恐らく聖守上人の手に成つたものであらう。湯屋は江戸初期に造替されたもので、古建築としての興味は持たれないが、本寺大湯屋と共に寺院浴室の構造を示すものとして興味深い。浴室は二區に分れ練行衆は北の間で浴し、その他の一般雜役は南の浴槽を使用するやう中央で區劃が施されてゐる。

さてこれらとは少し離れて良辨杉の西側に丹塗の古色美しい小宇が立つてゐる。これが修二會に用ひられる神聖なる閼伽井の覆屋—即ち閼伽井屋である。この閼伽井は實忠和尚が初めて十一面悔過の修法を行つた際、その二七日修業の初夜即ち二月朔日、諸神を勸請する神名帳を讀み上げるや、忽ち黑白の二羽の鵜が磐石を裂つて地中より現れ、傍の木に飛び去つたが、そのあとに香水充滿して、甘泉湧出したものと傳へられる。ところが、この神泉なるものは、實は若狹國遠敷郡にいます大明神が「十一面觀音悔過」を隨喜せられ、若狹の遠敷川から流さしめられたものといふので、この閼伽井をまた「若狹井」とも呼ばれてゐる。二月堂繪緣起 井戸の東奇りに遠敷明神を祭つてゐるのはこれに基いてゐる。

しかしこの傳說はともかくとして、前に述べた如く勝寶圖に見える三月堂の後に「井」の記入があるから、この井戸の所在はかなり古くからであつたらしい。この覆屋は何時頃に出來たものかは知られないが、治承年間の兵火には燒けたとあるから、既に平安朝にはあつたであらう。現在のものは鎌倉中期の樣式をもつてゐる。桁行三間、梁間二間、單層、屋根切妻造、本瓦葺、南面中央間に板扉がある外、總て大面取の方柱、斗栱は大斗肘木、天竺樣皿斗を使用してゐる。頭貫や木鼻に天竺樣繰形があり、妻には虹梁の上に板蟇股が置かれてゐる。軒一重垂、均衡のよくとれた軒や妻の出の大きい安定した感じを與へる快い建築物である。四周の飛貫上にはめた菱格子の裝飾もこの小建築には面白い効果を收めてゐる。

開山堂

三月堂の西側廣場の西北に土塀で圍まれた一廓がある。土塀の上には方形の屋根と、その上の露盤と寶珠が覗いてゐる。これが東大寺の開山良辨僧正の影堂である。從つて堂は開山堂、また良辨堂、僧正堂と云はれる。創建は知られないが、要錄別當章に

寛仁三年十一月十六日始行僧正堂御忌日

と見てゐるから、恐らくその頃に建てられたものであらう。治承には難を免れたが、東大寺別當次第辨曉の條に

正治二年十一月廿二日拜堂同年春此西南角大垣修造之良辨僧正御(影)記堂造之建仁二年六月廿七日辭退寺務幷大僧都同七月十一日入滅

とあり、現宇はこの時造替せられたものであるが、この建築はその後の要錄に

僧正堂事

右定親別當法師於竈神殿辰巳岡上被移造良辨僧正御影堂了即建長二年十一月十六日被展供養了

と見え、建長二年に至つて現地に移されたものである。堂は西を正面とする方三間のさびた趣を持つ小宇で、圓柱上に和様の大斗肘木を組み、一軒繁垂の軒を載せる。柱間は正面の中央間を棧唐戸、兩脇の間を連子窓とする。他はすべて壁で、東面北端間に便宜的な出入口を設けて庫裡と連接されてゐる。屋根には多少照りむくりがあるらしい。しかしこの堂に於て驚くべきはその内陣の光景である。吾々はこの内陣柱の柱頭に於て純粋な天竺様の美しい三手先に目を見はらせられる。

辨曉による造替には、作善集によると、重源が關與してゐるから、これは當然のことではあるが、中備の二斗は殊に好ましい意匠である。なほ柱にはかなりエンタレンスがついてゐる。天竺様では先年燒失した醍醐の經藏の柱にもこれがあつたから、恐らくその一特徴であつたらう。天井は化粧屋根裏、床はいま拭板敷であるが、もとは土間であつた。内陣は正面に棧唐戸をはめ、他は板壁、内に八角の厨子を据ゑ、ここに良辨僧正の像が安置されてゐる。内陣天井の化粧屋根裏の扱ひは頗る秀拔なものである。

厨子は同じく八角形の須彌壇の上に載せられてゐるが、正面にその稜角を向け、八面の中の前方二面に扉をつけてゐる。中々氣の利いた意匠である。建築と略々同時の作であらう。

須彌壇は一面に二つ、厨子は腰長押下の各面に一つの格狹間を入れてゐるが、極めて流麗な形をしてゐる。

開山像は彩色の一木造である。像高は三尺五寸、右手に大きな如意を執る。上背のある濶達なこの高僧の姿は、肉身の色、袈裟の朱、衣の白緑と共にすべて程よい古色を漂はせてゐる。衣文は稍々薄く形式化はあるにしても刀法は簡潔である。面貌は峻嚴であるが、一種の優しさがある。唐招提寺の鑑眞像、岡寺の義淵像と共に本邦上代の肖像彫刻中の絶品である。製作は平安中期の以前と見られてゐるが、要錄別當章に寛仁三年始めて僧正に良辨の忌日を行つたとあるのは、或はこの時に造顯されたものであらうか。

四月堂

三月堂の西側廣場に、これに東面して低い石壇の上に立つ方三間、重層、四注造の小宇である。普賢菩薩を安置し、又毎年四月に法華三昧會を修するところから普賢堂、四月堂または三昧堂と呼

ばれる。その草創は要錄に

治安元年仁仙大法師與助慶□人同心所創建也同造僧房云々

とある。

いまの堂は延享から寛政の間に再建せられたもので、總圓柱、組物大斗肘木、中備にも大斗肘木があり、頭貫の代りに正面及び兩側面では各間に虹梁を懸けてゐる。堂の小さい割に重層であるから高く不安定な感を與へ、しかも木割が細いので、あまり恰好のよい堂ではない。

目下千手觀世音を本尊としてゐるが、像は木造、著色、高さ八尺二寸、平安初期の樣式を持つてゐるので、唐招提寺金堂像に次ぐ古い千手像として知られてゐる。

東南院

南大門を潛るとすぐ右手に見える築地に圍まれた一廓は舊東南院である。現在東大寺の本坊であり、華嚴宗の宗務所となつてゐる。

東南院は貞觀十七年醍醐寺の聖寶によつて建てられたもので、この院が嘗て後醍醐天皇並びに明治天皇の駐輦を辱うした聖蹟地であることは既に述べた。いま當院の前にこの史蹟指定を示す丈餘の石標が立つてゐ、明治天皇の行在所は客殿の一隅に殘されてゐる。域内には聖武天皇聖靈殿があり、校倉(あぜくら)造の經庫がある。聖武天皇聖靈殿は維新までは東照宮の社殿をして用ゐられてゐたもの、江戸中期の建築である。毎年五月二日は聖武天皇の御忌日に當るので、最勝十講の盛大な祭典があり、御練りや舞樂などが行はれる。

經庫は現在寶藏に充てられてゐるが、正德四年知足院の東麓にあつた油倉の寶藏を移建したもので、龍松院代々諸興隆略記の正德四年の條に

同七月東南院經藏建組之事

油倉之寶藏及大破候に付一山相談之上東南院に引移加修覆爲經藏建立之

と記されてゐる。しかしこの油倉と云ふのは上司倉の後身であるから、その寶藏とは續要錄寛喜二年の條に

上司三宇藏、內一宇勸進所預之、一宇舞裝束等納之、一宇本願勅書以下文書納之

とある本願勅書以下の文書を入れてゐた一宇に當る。從つてこれは要錄に

印藏納流記公驗等銘一枚注伽藍緣起

と見える印藏に外ならず、この庫が嘗て聖武天皇銅板勅書や東大寺關係文書を藏してゐたのは當然のことであつた。よつてその建立は東大寺創建の年代より著しく下るものではなからう。

眞言院

眞言院又南院とも云はれ、東南院から道を距てて西北に四脚門を構へ築地に圍まれた一廓がそれである。その草創は弘仁十三年二月十一日弘法大師が勅によつて國家鎭護のため營まれた五間四面の灌頂道場に發する。永和二年五月の勅によると、二十一口の僧を安置し、息災增益の法を勸修し、規模頗る廣大なるものがあつたが、（要錄第四）鎌倉期に入つては春秋幾星霜、荆棘は林をなし莓苔は地を埋めるに至つた。しかしその中葉聖守上人によつて再興を見たが、寛永十九年十一月廿七日西の坂より出火した火災に類失した。いまの堂は正保四年以後に俊良淨慶和尙の發願によつて再興せられたもので、灌頂堂、地藏堂、神護殿を存するにすぎないが、鐘樓には次の刻銘を有する梵鐘が懸つて、聖守上人中興の業を物語つてゐる。

東大寺眞言院者弘法大師之聖跡
密敎傳持之靈地也而建立之後送
春秋顚癈以來涉星霜爰依高祖之
冥助以太神之加護忽遂中興之誓
願再祐上乘之靈場刻勵一身微力
瑩鑄九乳鎭洪鐘三有驚處夢六趣
感妙聲干時文永元年（子）甲卯月五日
鑄物師新大佛寺大工丹治久友

眞言院再興沙門聖守謹記

境內には東門を入つて塀の內側に石塔が一列に並んでゐる。これは維新まで東大寺の境內の諸所に散點した墓碑をとり集めたものであるが、その中で東門右側の一群中東端の一基に美しい鎌倉風の五輪塔を見るであらう。地輪を見ると左の刻銘がある。

東大寺戒壇院前律師
上僧墓所塔廟也

延慶二年二月二日　凝然惶造立

凝然は東大寺に於ける鎌倉期の碩學、延慶二年は彼が戒壇院長老であつた時であり、從つて前律師は圓照上人である。圓照上人は建治三年十月二十二日辰刻、洛東鷲尾に於て遷化せられたが、延慶二年はその三十三年に相當するので、凝然はこの企てに及んだものであらう。上人は戒壇院中興の祖、その事蹟については凝然大德に東大寺圓照上人行狀記三卷の著述がある。思ひ合せてこの五輪塔の存在は興味深いものがあらう。

戒壇院

東大寺の建立はまた日本佛敎史に於ける畫龍點睛であつた。それはこの建立を期して戒壇の創設されたことである。東大寺建立以前の日本の佛敎界にはいまだ授戒の十師具足せず、羯磨(こんま)を行ふを得なかつた。從つて律の規定による正式の受戒は行はれてゐなかつたのである。依つて聖武天皇は榮叡、普照をして、明眼の律師を唐に求めしめたところ、それに應じて鑑眞和上一行の來朝をみた。天平勝寶六年二月一行は幾多難航の後、難波に至り、入京して東大寺に入つた。直ちにわが國最初の戒壇が大佛敎の前庭に設けられ、鑑眞を戒師として聖武天皇、光明皇后、皇太子の登壇受戒が行はれた。この時菩薩戒を受くる者四百四十餘人、舊戒を捨てて具足戒を受くる者八十餘人であつた。

そして五月一日には戒壇院を別に建立する宣旨が下された。勅使藤原高房は天皇の授戒遊ばされた大佛前の戒壇の土を大佛殿の西方の今の地に移して戒壇院建立に着手したのであるが、翌天平勝寶七年九月造り畢つて十月十三日には導師鑒眞、呪願良辨以下百二十人奉仕の間に供養會が行はれ、續いて十五日この壇上に於て授戒が勤修せられた。

天平寶字五年正月二十一日には勅によつて下野藥師寺・筑紫觀世音寺にも同じく戒壇が建てられ、天下の三戒壇と稱せられたが、勿論東大寺の戒壇はその主位に立つものであつた。戒壇院は戒壇堂と講堂とをその主要なものとなし、他に廻廊、軒廊或は戒師の寄宿する六つの僧房とから成つてゐた。

その後の戒壇院は現代までに三回の火災に遭つてゐる。第一回は治承四年平重衡の兵火で、他の多くの伽藍と共に烏有に歸した。しかし戒壇には授戒といふ僧侶登龍門としての重大使命があつたがためにその再興は急がれ、建久九年三月十七日に戒壇堂の上棟があり、建長元年十一月廿八日に

講堂の落成が出來て再興全くなつた。ところが文安三年正月二日火を失して戒壇堂、講堂は僧坊と共に炎上し、戒壇は一時雨露に曝され雜草の生ひ茂るにまかせてあつたが、享德元年復興を見るに至つた。然るに永祿十年七月三好三人衆と對峙した松永久秀の兵がここに屯營して放つた火により三度灰燼に歸した。後慶長七年まづ假堂が立ち、今の戒壇堂は享保十六年慧光和尙の勸進により建立されたものである。しかし戒壇院の使命ももはや終つたので、戒壇は旣に忘れられんとしてゐるが、いまはその四隅に置かれて塑像四天王像によつて古美術巡歷者の來訪が絕えない。

さて戒壇院はいま大佛殿の西方、西塔址の北方に當つて存する。大佛殿廻廊の西南角から西に當つて小徑があり、それを下つてゆくと左側の高地に戒壇院がある。門を入ると、右側に築地で圍まれた一區があり、戒壇堂はその內に建つてゐる。但しこの堂の拜觀は特に寺務所へ願ひ出なければならぬ。

堂は方五間、重層、四注の建築で、うす暗い堂內一杯に漆喰塗二重の壇がある。これが戒壇である。壇は四面に階段を持ち、壇上中央の多寶塔は堂と同時に造進されたものであるが、塔には授戒の本尊である多寶如來・釋迦如來の二佛が安置されてゐる。像は鑒眞和上が將來したと傳へられるが、火中したものか全表面に鑄損を見せてゐる。衣文に戴金文樣を見受けるのは後補である。

四天王像

さて次に四隅の四天王像を見よう。四天王像の姿態は法隆寺金堂像の直立靜態に始まり、當麻寺金堂像や法隆寺食堂像のややリズミカルに動き始めようとする形態を通り、三月堂像の活動性に移つて來るのであるが、本像はこの完全に活動性を附與されたもの、卽ち四天王像の完成相を表したものである。多聞天像の右手をかかげて塔をささげた形式を始め、後の四天王像の造顯に當つて、何等かの意味で、この像の影響をうけないものはないであらう。この意味から云へば、本像は四天王像の一つの峠に立つものである。像高は略々等身、純化された各部の表現は全身を貫くリズミカルな運動表現の中に動中靜の迫力を湛へてゐる。また足下に踏まへた邪鬼が脚下に伏しながら、仰いで苦悶する狀はよく護王折伏の力量を現はして遺憾ない。

著色はよく殘り、殊に甲冑や裝身具には朱・丹・褐・綠靑・紺靑・群靑等を始め、金泥や截箔を以て一面に彩られてゐる、顏面には墨で毛描きがあり、瞳には所謂黑耀石の嵌入がある。

本像の製作は以上によつて知られる如く、天平盛期のものとされてゐる。しかし天平當初の戒壇堂の四天王像は銅像であつたから、當院傳來のものではなく、江戶の再興後移安されたものと考へられてゐるが、出自を明かにしないのは遺憾である。

戒壇堂の西方二十間ばかり離れて千手堂がある。一基の石燈籠が前にあつて屋根の深い姿のよい堂である。堂の後方に庫裡がある。本堂には平安時代の木造千手觀音（國寶）を安置して千手堂の名がある。他に愛染明王像（木造）、また唐招提寺開山堂の像を江戸時代に模した鑒眞和上像（木造）がある。共に國寶ではあるが、餘り四天王像が優れてゐるから一般には問題とされてゐない。

なほ戒壇院はいま修二會の別火房に當てられてゐる。即ち修二會の始まる十日前の二月廿日から練行衆はここに籠つて嚴格なる潔齋に服するのである。

勸進所

戒壇院の東、大佛殿のあたかも西に當つて白壁の土塀をめぐらした一廓がある。古くは戒壇院の穀屋の地であるが、貞享の頃公慶上人これを增築して龍松院と稱し、大佛殿再建の勸進所をここに置いた。それでいまは勸進所又勸化所と呼ばれてゐるが、これは重源の先縱を追つたもので、重源の勸進所もここにあり、又彼はここで歿した。いま阿彌陀堂、八幡殿、俊乘堂、校倉を存し、八幡殿には僧形八幡神像を藏するので著名である。

僧形八幡神像

治承四年の東大寺の回祿は鎭守八幡宮の社壇をも灰燼と化せしめた。依つて新殿は重源によつて再建され、建久八年二月廿九日上棟が行はれたが、本像はその新しい御神體として刻まれたものである。造顯の詳細は像裏面に長文の墨書があつて知られてゐる。それによると今上（後土御門天皇）、太上（後鳥羽天皇）、後白河法皇、その他高貴の方々をはじめ奉り、數多の人達の結緣により造立されたもので、安阿彌快慶が施主となり、小佛師多數の手になつたものである。小佛師の連名の中には運慶の名も見える。

像高二尺八寸七分、袈裟を掛け右手に錫杖を執り、蓮座の上に坐してゐる。これは本地が地藏と考へられたのでその形相をとつたものであらうが、快慶獨特の精緻な刀法によつて、極めて寫實的に刻まれてゐるため佛家の肖像彫刻とも云はるべき風貌をもつてゐる。しかしこの神像としてはあまりに抹香臭い表現は明治維新の排佛毀釋に際して禍した。即ち東大寺から分離獨立した八幡宮の神官は、無慘にもこの世にも稀なる形相の神像を佛教的なものとして佐保川の上流夷川の河原に捨て去らしめた。しかしこれを知つた東大寺では早速捨ひ戻して現宇に安置したものである。

現宇はもと聖武天皇の聖靈殿であつたが、これによつて、聖靈殿は東南院境内の東照宮あとへ移御

し奉つた。思へば嘘のやうな話ではあるが、轉換期の日本では、各所で行はれた事柄の一つであつた。

本像は嘗ては御神像として社殿の奥深く秘覆されてゐた爲め、損傷もなく、鮮やかな彩色を保つてゐる。殊に寫實的な彩色法は、その寫實的な刀法と相俟つて生けるが如き感覺を與へる。臺座、蓮瓣の繧繝彩色は殊に見事である。

公慶堂

堂は上人入滅の翌年、遺弟公盛の造營せるもの（東大寺年中行事記）、方三間、入母屋造、本瓦葺の小宇で、上人の影像を安置してゐる。像は難波の佛匠法橋性慶等によつて刻せられたが、その頭面は久しく上人に親事してゐた弟子即念が手づから摹刻したものである（公慶上人年譜）。堂内には位牌があり、表に「造東大寺大勸進上人公慶上人敬阿彌陀佛」、裏に「式部卿公慶上人寶永二乙酉年（今次歳）七月十二日入寂春秋五十有八」と刻まれてゐる。

なほこの堂に安置してあつた地藏菩薩は、今は奈良帝室博物館に陳列されてゐるが、像高二尺九寸八分、雲座高六寸といふ三尺に足りない小立像であるが、右足枘外側に「巧匠法橋快慶」と刻銘があり、前の僧形八幡像と共に安阿彌風と稱せられる快慶の代表作品である。快慶は康慶の門人として、南都兩寺の再興に當つては運慶と共に師を扶けて活躍したが、特に東大寺の勸進上人たる重源の感化を享けて淨土教的傾向強く、自らも安阿彌陀佛と名乘つて、來迎思想を反映した美麗な佛像を造り出し、世に安阿彌風と呼ばれた。

本像は現在は雲座以外の莊嚴具を逸してゐるが、佛身は完全に傳へられてゐる。そしてその枘銘にも記すごとく、彼の法橋時代の作であるから、從つて壯年期の作例として知られてゐるが、西方院阿彌陀像等のやうな晩年の作品に較ぶれば、未だ形式の固化は見えず、彼の代表的な作風を示してゐる。

公慶堂の北にあたり、中門を潜つた内側の北に阿彌陀堂がある。ここに安置する五劫思惟阿彌陀像と稱するものは、恰も大きな髻でも結つたやう奇妙な相好の坐像である。阿彌陀佛がその因位法藏菩薩と稱せられた頃、四十八願を起すために五劫といふ極めて長い間に亙つて思惟してゐた爲めに、その間に頭髮が著しく延びたことを表してゐるといふ。唐の善導大師が作られたのを俊乘上人が宋から將來したといふ傳説が本像に附せられてゐるが、製作はわが室町時代のものであらう。

勸進所

勸進所を奥に入り八幡殿の前を左に廻つたところに奈良時代の校倉が建つてゐる。もと勸學院の

經庫であつた。屋根は四注造、本瓦葺、軒は一重の繁垂に舟肘木を用ひてゐる。

指圖堂

勸進所の前方左側にある小宇である。淨土宗祖法然上人二十五靈場の一で、この名は俊乘坊重源が東大寺再建中に、その師僧である法然上人が弟子の大業を案じてここに來り、何彼と指圖を與へたといふ傳說から來てゐる。現在の堂は德川時代のもので、本尊は法然上人畫像であるが、古くは觀眞房の筆になる法然上人畫像が安置されてゐたやうである。堂の東隣りに釋迦（發遣）と阿彌陀（來迎）とにゆかりある名をもつ遣迎菴といふ茶席がある。あまり古くはないやうであるが、庭前はまことに結構である。

知足院

正倉院の東側を北へ行くと、右手の山腹に高い石段が見える。これが知足院である。本堂の本尊は快慶風のもので、蓮臺も精巧であり、結構なものであるが、それよりも有名なのは本堂の南方丘上の八重櫻である。いまは古木枯れ、蘚が生えてゐるが、五月上旬に開花し、花瓣は狹長で、その數三十にも達し、蕾のときは濃紅で、開花すると淡紅色となる。奈良の八重樹は芭蕉の「奈良七重七堂伽藍八重櫻」の句で著名であるが、今はこれと奈良縣師範學校正門前にあるもの（明治年間知足院より移植）とより存しない。依つて大正十二年三月史蹟名勝天然紀念物保存法により「知足院奈良八重櫻」として天然紀念物の指定を受け、種族保存に力めてゐる。寺からは奈良市西郊の眺めがよい。

手向山八幡宮

天平十二年聖武天皇は知識寺の盧舍那佛を拜し給ひ、大佛造顯の大願を發し給うたものの、御心中はなほ大いに躊躇あらせられるところがあつた。時に宇佐にいます八幡の大神親ら天神地祇を率ゐて神助し奉らんと託宣を發せられたので、はじめて造立の志を定め給うたと傳へられるが、その造顯もまたその神助によつて完成を遂ぐるを得た。

これによつて天平勝寶元年十一月七日、大佛の鑄成略、成らんとする頃、大神は盧舍那佛を拜せ

んとして平城に神幸あらせられた。十二月六日平群郡平群山に御着、この日京師に入り、宮南梨原宮に神殿をつくつて神宮とした。そしてその十五日、大神の彌宜尼大神朝臣杜女大神の代參として紫の輿にのり東大寺を拜するや、時に孝謙天皇・聖武太上天皇・光明皇太后も行幸あり、百官及び諸々の氏人も悉く東大寺に會し、僧五千口を請じて禮佛讀經せしめられた。この時大唐、渤海、吳の樂、五節の田儛、久米舞を奏し、更に大神に神階一品を、比咩神に同二品を奉り、又左大臣橘宿彌諸兄は詔を奉じて宇佐の大神が大佛造顯に隨喜贊同し給ひしことの次第を宣命體で奉讀した。かくて八幡大神は東大寺の鎭守となつたのである。はじめ神殿は大佛殿の南、鏡池の東に營まれたらしいが、その後建長二年今の地に鎭座あらせたものといふ。祭禮は轉害會と稱せられ、轉害門を御旅所として行はれたことは既に述べた。この祭禮は天文八年までは勅祭であつた。寛永十九年火災に罹り、今の社殿は元祿四年公慶上人の再建せるものである。明治維新の神佛分離に際して東大寺から分割され、今縣社に列してゐる。祭神は中殿に應神天皇左殿に比咩神、右殿には仲哀天皇及び神功皇后、南の若宮に仁德天皇をまつる。

東大寺の造營に際して、それまで一地方神であつた宇佐八幡が、かくの如く中央的な存在にまでのし上つて來た理由については、從來諸家の論がある。宮地博士は絕えず外來の思想に接觸しつつあつた九州北岸の地方には、早くから神佛習合の思想が萌してゐた。それ故に大佛造顯に際し他に先んじてあの習合的な神託を發したものではないかといはれ（神祇史要項）、又これに加へて土田杏村氏は八幡神は採鑛の神であつたから、この事に及んだものでないかと推論された（東大寺大佛と宇佐八幡。土田杏村全集第十卷）。この考へは竹内勝太郎氏によつても說かれてゐる（藝術民俗學研究）。

境內には八幡形燈籠と稱せられる蒼古たる形式の石燈籠がある。これは春日砥でつくられ、文治二年僧勇專の奉納と傳へられる。その南の石壇下には菅公の腰掛石といふのがあり、公はこれに腰かけて「このたびはぬさも取りあへず手向山」の歌を詠んだといはれてゐる。しかしこれは勿論中世ものごのみの風流人が考へ出した話說に過ぎまいが、神社の東側若草山の西麓は古來紅葉で聞えてゐる。腰掛岩から少し南に攝社住吉神社本殿があるが、これは室町初期の建築として國寶に指定せられてゐる。社殿は小さな流造りであるが、柱には大きな面がとつてあり、斗栱・緣勾欄・擬寶珠など當初のものを存して注意せられる。しかし向拜頭貫上の蟇股が內部彫刻を失つてゐるのは惜しい。なほ樓門の前に北面して一宇の校倉が三月堂經庫と相對して存する。これは三月堂經庫と共に正德年間油倉の寶藏の一宇を移し建てたものと云はれるから奈良朝の遺構であらうが、惜しむらくは修補が著しい。寶物には舞樂面二十三面、四枚居木鞍、黑漆螺鈿唐鞍等各一背、備前國長船住

長光銘の赤銅造太刀一口の國寶を存し、その他に鳳輦屋根敷板に正長元年修覆とあり、葱花輦屋根下棟に康應元年造替とある、鼓、胡德樂瓶子、三鼓胴、狛犬などの寶物がある。

附記

本書は編輯者の要求によつて倉皇の間に稿をなすべく餘儀なくされたものであるから、資料の吟味も十分でなく、不備失當も多いことであらうが、幸ひに本書が東大寺をみる人々のために幾分なりとも役立つことがありとすれば、それは稿をなすに當つて參照した諸家の著作に負ふものである。依つて次にその重なるものを列記(五十音順)して感謝に代へる。

足立康　東大寺東塔の落成年代　佛教美術第一九冊　昭和八年三月

天竺樣の遺構と重源上人　東洋美術第二二號　昭和十年十二月

東大寺本坊の校倉に就て　國寶第一卷第一號　昭和十三年六月

東大寺梵鐘及び鐘樓の製作年代　大和志第八卷第七號　昭和十六年七月

天沼俊一　創立當時に於ける東大寺南大門東西塔院及び其沿革附講堂食堂僧房　建築雜誌第二八三號　明治四十三年七月

東大寺東塔院西塔院址　奈良縣史蹟勝地調査會報告書第五回　大正七年三月

安藤更生　三月堂　飛鳥園發行　昭和二年十一月

家永三郎　東大寺大佛の佛身をめぐる諸問題　史學雜誌第四九編第二號　昭和十三年二月

大田博太郎　東大寺の鐘樓について　建築史第二卷第六號　昭和十五年十一月

大屋德城　東大寺史　東大寺發行、　昭和十五年五月

關野貞　天平創立の東大寺大佛殿及其佛像　建築雜誌第一八二號　明治卅五年二月
筒井英俊　東大寺現存遺物銘記及文様　寧樂第一四　昭和六年十一月
正倉院に關する二、三の考察　寧樂第一五　昭和七年十一月
中上川彦一郎　東大寺法華堂禮堂の造營年代　建築史第一卷第三號　昭和十四年五月
東大寺南大門の再興　建築史第三卷第一號　昭和十六年一月
福山敏男　東大寺法華堂に關する問題　東洋美術第二四號　昭和十一年七月
東大寺の規模　『國分寺の研究』所收　昭和十三年一月
其他奈良縣廳社寺技術室所藏奈良縣古社寺建造物調書、東大寺大鏡等

大和路（東大寺）

編纂者　新井和臣　大阪市天王寺區上本町六丁目一番地　關西急行鐵道株式會社

發行者　久保常明　大阪市天王寺區上本町六丁目一番地　關西急行鐵道株式會社

印刷者　大橋松雄　東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所　共同印刷株式會社　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　大阪市天王寺區上本町六丁目一番地　關西急行鐵道株式會社內　近畿觀光會

昭和十六年八月三十日印刷
昭和十六年九月五日發行

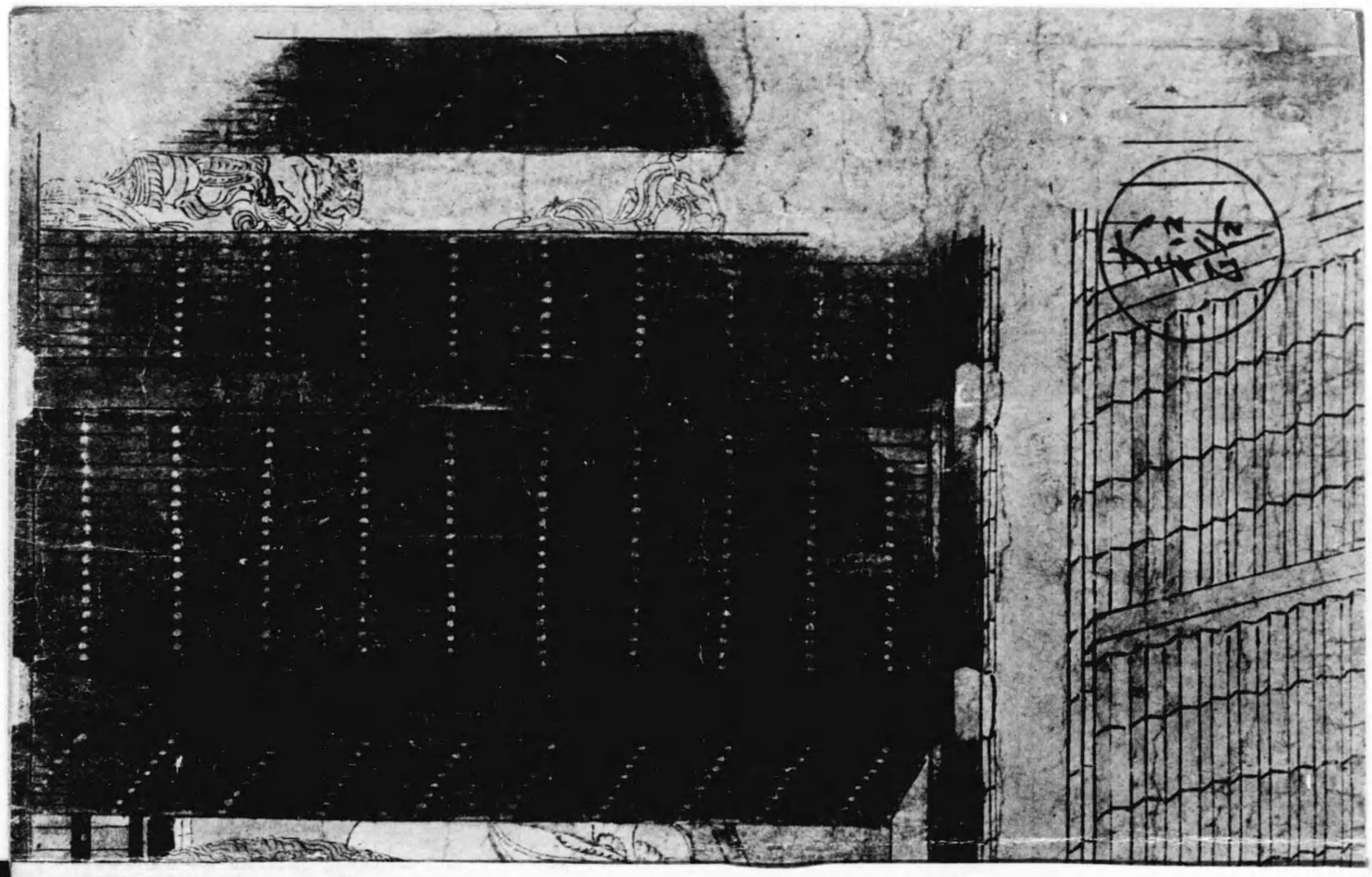
不許複製

已賣紙規第二三四號東京府規格外許可

東大寺正誤表

頁	行	誤	正
一二	三	兼左近衛	兼左近衛中將
〃	一一	檢校修業傳燈	檢校修業賢傳燈
一三	四	歸干平城	歸干平安城
一六	七	大佛師法印尊、	大佛師法印院尊、
五〇	五	なければなるまい。	なければなるまい
六九	一四(終)	枝	技
七四	一四	寛永年中井大和守正清	寛永年間、中井大和守
八八	二	と袖口の表は朱、	下衣袖口の表は朱、
〃	一三	呵型	阿型
一〇四	七	建物がいま三月堂	この建物がいま三月堂
一一四	三	連子窓とする	連子窓とし、
一一五	八	僧正に良辨の忌日	僧正堂に良辨の忌日
一一七	四	社殿をして	社殿として

917
206



906
916

終